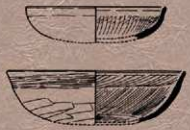
三重県埋蔵文化財調査報告　87－10

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

第 3 分 冊　4

西 野 7 号 墳　　焼 野 遺 跡



1991・3

三 重 県 教 育 委 員 会
三重県埋蔵文化財センター

車輪石・石鋼・管玉・ガラス小玉・石枕（西野７号墳）

焼野遺跡遠景（北上空から）

例　　言

1．本書は平成２年度に三重県教育委員会が、日本道路公団名古屋建設局から委託を受けて実施した近畿自動車道関・伊勢線第８次区間（久居～勢和）建設予定地内の遺跡発掘調査（整理・報告書作成業務）にかかる西野７号墳、姥野遺跡他２遺跡の調査報告書（第３分冊４）である。

2．調査にかかる費用は、日本道路公団の全額負担による。

3．調査（整理・報告書作成）の体制は下記のとおりである。

・調査主体　　三重県教育委員会

・調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第２課第１係

次長兼調査第２課長　山澤義貴　　管理指導課

主査　新田　洋・主事　河北秀実　　主事　小坂宜広

主事　増田安生・主事　齋藤直樹　　主事　江尻　健

技師　大川勝宏・主事　伊藤裕偉

主事　角谷泰弘（伊勢市教育委員会から派遣）

主事　稲本賢治（多気町教育委員会から派遣）

主事　前川嘉宏（玉城町教育委員会から派遣）

川崎正幸（臨時調査員）

反町登子・谷久保美知代・吉村道子・白石みよ子

山分孝子・乾ひとみ・上村かおり・竹内由美

栄野妙子・中山　学・反町有子（室内整理員）

森田幸伸（皇學館大学学生）

近藤大典（皇學館大学学生）

4．本書作成にかかる各整理は上記体制で行い、報文の執筆分担については目次、及び各文末にも明記した。

5．本書掲載の４遺跡については、既に刊行の「近畿自動車道（久居～勢和間）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ」（三重県教育委員会・1988．３）、『　同　　Ⅴ』（三重県教育委員会・1989．３）にその調査概要は公表しているが、本書をもって最終的な報告とする。

6．本書に収録した各遺跡の記録類、出土遺物は三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7．本書に使用した遺構表示略記号は下記のとおりである。また遺構実測図作成にあたっては国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、図面上の方位は座標北を用いた。

ＳＢ　竪穴住居、掘立柱建物　　ＳＤ　溝

ＳＫ　土坑

8.　スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ. 前　　言……（新田　　洋）… 1

Ⅱ. 西野7号墳……（山崎　恒哉／稲本　賢治）… 7

Ⅲ. 焼野遺跡……（新田　　洋）… 23

Ⅳ. 西野・北広遺跡……（角谷　泰弘）… 55

Ⅴ. 焼野古墳……（稲本　賢治）… 57

図　版　目　次

西野７号墳

ＰＬ．１　調査風景 …… 15
ＰＬ．２　調査前風景・調査区全景 …… 16
ＰＬ．３　調査前全景・調査区全景 …… 17
ＰＬ．４　古墳近景・古墳区近景 …… 18
ＰＬ．５　墳丘近景・墳丘区近景 …… 19
ＰＬ．６　調査風景・管玉出土状況 …… 20
ＰＬ．７　石釧出土状況 …… 21
ＰＬ．８　出土遺物 …… 22

焼野遺跡

ＰＬ．９　調査前近景・調査風景 …… 42
ＰＬ．10　調査区全景・調査区全景 …… 43
ＰＬ．11　ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ３・ＳＢ４ …… 44
ＰＬ．12　ＳＢ１・ＳＢ６ …… 45
ＰＬ．13　ＳＢ７・ＳＢ８ …… 46
ＰＬ．14　ＳＢ８遺物出土状況・ＳＢ９ …… 47
ＰＬ．15　ＳＢ13・ＳＢ11・ＳＢ12 …… 48
ＰＬ．16　ＳＢ11・ＳＢ12 …… 49
ＰＬ．17　ＳＸ15・甕出土状況 …… 50
ＰＬ．18　出土遺物 …… 51
ＰＬ．19　出土遺物 …… 52
ＰＬ．20　出土遺物 …… 53
ＰＬ．21　出土遺物 …… 54

焼野古墳

ＰＬ．22　調査区遠景・調査区近景 …… 59

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 4

西野７号墳

第２図　古墳群地形図 …… 7
第３図　調査区位置図 …… 8
第４図　調査前測量図 …… 9
第５図　調査区平面図 …… 10
第６図　墳丘断面図 …… 11
第７図　出土遺物実測図 …… 13

焼野遺跡

第８図　遺跡地形図 …… 23
第９図　地区割図 …… 24
第10図　調査区位置図 …… 24
第11図　遺構平面図 …… 25
第12図　ＳＢ１・３・４実測図 …… 26
第13図　ＳＢ・２・５・11・12実測図 …… 27
第14図　ＳＢ８遺物出土状況 …… 28
第15図　ＳＢ６・８～10・13・14実測図 …… 29・30
第16図　ＳＸ17実測図 …… 30
第17図　遺物実測図 …… 32
第18図　ＳＢ８出土遺物実測図 …… 33
第19図　遺物実測図 …… 36
第20図　遺物実測図 …… 38

西野遺跡・北広遺跡

第21図　調査区位置図 …… 55
第22図　遺物実測図 …… 55
第23図　五輪塔実測図 …… 56

焼野古墳

第24図　遺跡地形図 …… 57
第25図　調査区位置図 …… 57
第26図　出土遺物実測図 …… 58

表　目　次

第１表　実測図整理番号一覧 …… 3
第２表　発掘調査遺跡一覧 …… 5～6
第３表　石釧・車輪石出土古墳 …… 12

Ⅰ．前　　言

1．調査の経過

近畿自動車道関・伊勢線第８次区間（久居～勢和間）にかかる埋蔵文化財発掘調査はこの昭和62年度調査が第４年次にあたる。この第８次区間については当初、昭和64（平成元）年度中に道路供用開始という建設工事計画とも関連して、当年度と次年度（62年度）で現地遺跡調査をすべて完了するという計画の下で、各関係機関と調整、協議を図っていたところであった。

しかし、道路買収の進捗状況の関係もあり、久居市、一志町、嬉野町に所在する遺跡のほとんどが当年度に持ち越された結果となった。前年度末にかろうじて調査の実施できた小戸木遺跡（久居市）、庄村遺跡（一志町）をのぞく計12遺跡、面積にして約９万㎡という膨大な面積が当年度の発掘調査対象となった。

また、当初は計画に上がっていなかった、新発見遺跡としての戸木遺跡（久居市）については、年度中盤の試掘調査の結果、約１万㎡の中・近世の集落遺跡であることが判明し、当遺跡については久居インターから程近く、工事の早期着工地域でもある関係から、調査工程と期間に関して日本道路公団との間で度重なる協議がもたれた。そして、最終的には年度後半より２班体制を編成し、年度末には工事工程上調査を全て完了せざるを得ないという結論に達した。

62年度の発掘調査は、特に嬉野町地内において、当町を流れる中村川両岸の段丘、及び台地上に遺跡が言わば数珠上に連なった状況が道路建設予定地内にもそっくりそのままあてはまった形となり、天保遺跡、天保古墳群、堀之内遺跡等、路線内をほぼすべて掘削する形の大規模調査となった。なお、天保古墳群については、視覚的にも確認されていた１号墳以外にさらに４基の古墳が掘削と同時に新発見され、調査の一部は次年度（63年度）に持ち越された。

さて、63年度に至っては残りの現地発掘調査と共に、昭和59年度から開始した第８次区間（久居～勢和）の整理・報告書作成業務も一部行うという契約のもとで調査を開始した。発掘調査のその大部分は前年度からの継続事業で、北から鳥居本遺跡（一志町）、西野７号墳・天保古墳群・堀之内遺跡（嬉野町）がその対象となった。堀之内遺跡は前年度に確認されたＣ地区下層の縄文時代中期末から晩期にかけての調査が行われたが、道路建設工事の工程と調査工程との再三の協議・調整を要する状況下にあり、また周囲の水田からの湧水対策も加えて悪条件の中での調査となった。

いずれにいたしましても、この昭和62・63年調査についても、日本道路公団松阪工事事務所をはじめ、県近畿道対策室、久居市、一志町、嬉野町の各関係機関と各位には調査の円滑推進にあたって多大なるご理解とご協力を得ました。また、現地にあっては、三重県土地開発公社、並びに地元自治会と多くの方々の暖かいご援助をうることができました。文末ながらここに記して、深甚の謝意を表します。

2．調査の体制

発掘調査は三重県教育委員会が主体となり、同事務局文化課文化財第２係が担当した。

（昭和62年度調査体制）

文化財第２係長　伊藤　久嗣　総括
技師　新田　洋　調整・協議、焼野遺跡ほか
主事　山下　雅春　戸木遺跡ほか
主事　田中喜久雄　戸木遺跡ほか
主事　河北　秀実　堀之内遺跡ほか
主事　増田　安生　堀之内遺跡ほか
主事　野田　修久　天保古墳群ほか
主事　田村　陽一　天保遺跡ほか
主事　宮田　勝功　鳥居本遺跡ほか
臨時調査員　木許　守
室内整理員　谷久保美知代・近藤　豊美
〃　大西友子・野崎栄子・孝久由希子
〃　山本紀子・中谷とも代
〃　東千恵子・山際みち子

発掘調査土木工事部門担当

三重県土地開発公社
堀内　信吾
浜口　安光
中田　辰実
稲葉　庄衛

調査指導（昭和62年度、順不同、敬称略）

堅田　直（帝塚山大学教授）
木下　正史（奈良国立文化財研究所）
八賀　晋（三重大学教授）
我孫子昭二（東京都文化課　学芸員）
磯部　克（県立津西高等学校）

（昭和63年度調査体制）

主幹兼
文化財第２係長　伊藤　久嗣　総括
技師　新田　洋　調整、西野7号墳ほか
主事　田中喜久雄　調整ほか
主事　河北　秀実　鳥居本遺跡ほか
主事　小坂　宜広　ビハノ谷遺跡ほか
主事　山崎　恒哉　西野７号墳ほか
主事　野田　修久　天保古墳群ほか
室内整理員　谷久保美知代・近藤　豊美
大西　友子・野崎　栄子
脇葉　輝美・東千　恵子
山際みち子・中谷とも代
孝久由希子・小坂規美子

調査指導（昭和63年度、順不同、敬称略）

八賀　晋（三重大学教授）
伊藤　秋男（南山大学教授）
大脇　潔（奈良国立文化財研究所）
三辻　利一（奈良教育大学教授）
西山　要一（奈良大学助教授）
千葉　豊（京都大学埋蔵文化財調査センター）
石黒　立人（愛知県埋蔵文化財センター）
磯部　克（県立津西高等学校教諭）
奥　義次（度会町教育委員会）
小玉　道明（三重県史編纂室主幹）
広瀬和久・原　正之（県農業技術センター）

発掘調査土木部門担当

三重県土地開発公社
堀内　信吾
浜口　安光
稲葉　庄衛

3．調査、及び整理の方法

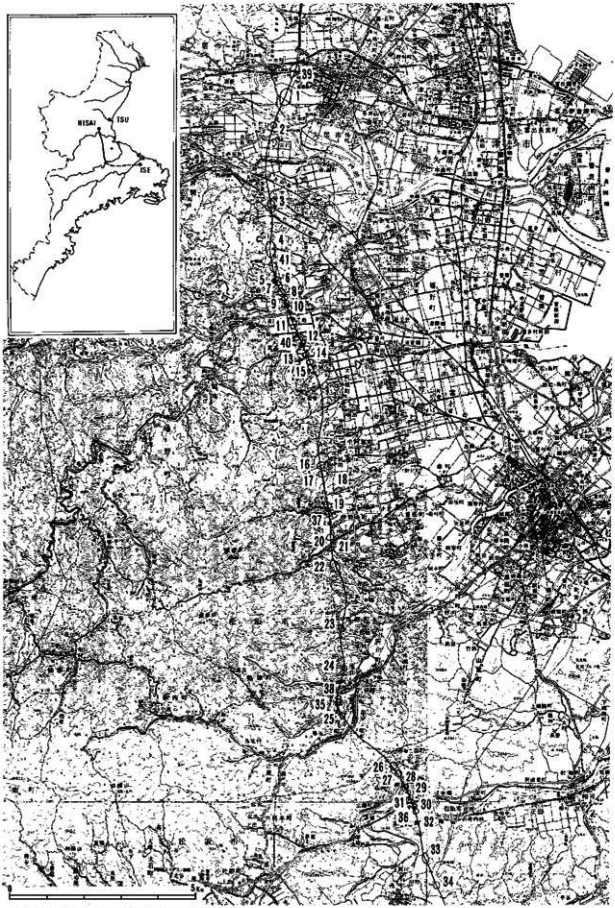
現地調査の方法については当年度同時刊行の第3分冊の1前書を参照されたい。また、資料整理の方法も基本的に同じでここでは詳細を省くが、各遺跡の遺構実測図と遺物実測図には、第1表のように5桁の番号を与えて整理した。

近畿自動車道第8次区間（久居～勢和）での遺跡番号―0001～　という方法である。

遺跡番号	遺跡名	遺構実測図	遺物実測図
4	西野7号墳	4―0001～0003	4―0001～0012
6	姥野遺跡	6―0001～0015	6―0001～0407
41	西野遺跡 北広遺跡	―――	41―0001～0003
5	姥野遺跡	―――	5―0001～0003

第1表　実測図整理番号一覧

（新田　祥）



第１図　遺跡位置図（１）（１：100,000）

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)		調査期間（元号は昭和）	担当者	概要
1	小戸木遺跡	久居市小戸木町	192 240	計 432	62. 3. 3～ 3. 5 62. 9.20～ 9.24	宮田 勝功 本許 守	遺構・遺物なし（試掘） 〃 （〃）
2	出村遺跡	一志町庄村		304	62. 9.14～ 9.20	新田 洋	遺構なし・遺物散布（試掘）
3	島田本（八反田）遺跡	一志町小山、新沢田	8,900 2,640	11,540	62. 9.24～63. 3. 7 63. 5.16～ 7.27	宮田 勝功 小坂 宜広 河北 秀実	弥生中期方形周溝墓など検出 鳥為時代の井戸検出
4	西野（天花寺）古墳群	嬉野町天花寺		3,400	62.11. 9～11.31 63. 5.16～ 9.28	新田 洋 新田 洋 山崎 哲俊	（山林伐開） 石釧・車輪石片出土、前期の古墳1基
5	嬉野（口山田）古墳	嬉野町島田		2,010	62.7.11～ 9.30	山下 雅春	古墳は畑管せによる盛土と判明、石敷出土（試掘）
6	嬉野（口山田）遺跡	嬉野町島田		3,500	62. 5.11～ 8.24	宮田 勝功 新田 洋	奈良時代の住居跡など検出
7	大保(大保B)遺跡A・B区	嬉野町島田		7,200	62. 5. 7～ 9. 4	田村 陽一	平安時代の竪穴住居など検出
8	天保(一志西部)遺跡 C区	嬉野町島田		5,000	62. 5.18～ 6.30	増田 安生	奈良～平安時代の竪穴住居など検出
9	天保(天保整跡)遺跡 D区	嬉野町島田		3,800	62. 7. 1～ 8.12	増田 安生	〃
10	大保古墳群（含、天保遺跡E区）	嬉野町島田		5,390	62. 8. 5～63. 7.12	田村 陽一 野田 修久	6世紀中ごろの横穴式石室など
11	鵜之内遺跡 A区	嬉野町鵜之内	1,450		62. 2.23～ 3.13	新田 洋	（制道部分の調査）
	A区 〃		2,200		62. 5. 6～ 7.16	河北 秀実	古墳～中世時代の住居跡など検出
	B区 〃		2,200		62. 7.23～10. 1	河北 秀実	古墳～平安時代の溝など検出
	C区	嬉野町薬王寺	5,400	14,250	62. 9. 1～63. 3.19	増田 安生	弥生後期竪穴、平安の掘立柱建物など検出
	D区 〃		700		62.10.25～11.20	本許 守	古式土師器出土、ヤナ状遺構検出
	C区下層 〃		1,900		63. 5.18～ 8.13	田村 陽一	縄文中・後・晩期の土器多数出土
			400		62. 5.20, 6.29～ 7.22	河北 秀実	（調査区南端、北端部の試掘）
12	中尾遺跡	嬉野町薬王寺	93 507	600	62. 3. 4 62. 5. 6～ 6. 5	河北 秀実 河北 秀実	（試掘） 掘立柱建物3棟検出
13	東峡遺跡（ビノノ谷古墳群）	嬉野町薬王寺・下之庄	1,000 12,000	13,000	62. 3. 2～ 3.30 62. 5.19～ 8.12	野原 宏司 野田 修久 本許 守	（山林伐開、表土剥ぎ） 古式土師器出土、後期古墳1基
14	女年谷古墳群	松阪市小野町 嬉野町薬王寺・下之庄	4,031 3,140	7,171	61.12.15～62. 2.21 62. 5. 7～ 7.11	野原 宏司 本許 守 野田 修久 山下 雅春	（山林伐開、第1次調査） 須恵器の古墳群
15	平田遺跡	松阪市小野町		228	61. 2.18～ 2.24	田村 陽一	遺構なし、遺物散布（試掘）
16	山見（下山見）遺跡	松阪市小阿坂町		224	60.11.12～11.20	野原 宏司	遺構なし、遺物散布（試掘）
17	新田遺跡	松阪市小阿坂町	288 4,400	4,688	60.11.15～11.25 60.12.27～61. 3.25	野原 宏司 野原 宏司	（試掘） 縄文後期土器出土
18	垣内田古墳群（垣内田遺跡）	松阪市岩内町	428 5,500 600	6,528	60.11.26～12.12 60.12.27～61. 3.25 61. 6.30～ 7.30	野原 宏司 吉本 康夫 野田 修久	（試掘） 横穴式石室墳を主体とする古墳群
19	藤ノ下（岡崎古墳群）遺跡	松阪市岩内町	1,100 1,400	2,500	61. 3. 1～ 3.25 61. 6.30～10. 3	田村 陽一 田村 陽一	（試掘） 良好な資料となる縄文後期土器多数出土
20	榎兵遺跡	松阪市伊勢寺町	304 2,404	2,708	60.10.18～10.24 60.11.26～61. 3.18	川村 陽一 河北 秀実	（試掘） 奈良～平安時代の竪穴住居検出

第2表　発掘調査遺跡一覧（太ゴチックは本書所収遺跡）

番号	遺跡名	所在地	調査面積(㎡)		調査期間(元号は昭和)	担当者	概要
21	平林古墳群	松阪市伊勢寺町		計 4,021	61. 6. 9～10. 3	新田 洋 河北 秀実	石室を主体とする古墳群
22	横尾（西野）墳墓群	松阪市伊勢寺町、岡山町	5,500 2,500	8,000	60. 7. 1～61. 2. 27 61. 5.31～12. 5	田坂 仁 宮田 勝功 田中喜久雄 宮川 勝功	500基におよぶ中世墓群 後期小型円墳（横穴式石室）2基 後期小型方墳（木棺）2基
23	さんざい林遺跡	松阪市西野町		176	60.10.25～10.26	田村 陽一	（試掘）
24	坂東（大河内5号）古墳	松阪市狩川町		180	61. 7.23～ 8.19	野田 修久	中世土器片散乱、古墳にあらず（試掘）
25	大河内城郭切	松阪市大河内町		600	62. 1. 5～ 2.25	宮田 勝功	中世北畠氏の平山城大河内城の堀切
26	上ノ広（森下瓶南方）遺跡	松阪市広瀬町	224 1,136	1,360	60. 3.22～60. 3.31 60. 7. 1～60.10.14	上村 安生 田坂 仁 宮田 勝功 田村 陽一 野原 宏司	（試掘） 弥生部末～縄文時代の石器多数出土
27	人塚墓（人塚墓南方）遺跡	松阪市広瀬町		114	60.10.28～60.10.31	田村 陽一	遺構、遺物散乱（試掘）
28	花ノ本（山崎）遺跡	多気町牧	52 5,800	5,852	59.12.10 60. 1.28～60. 3.26	田村 陽一 杉谷 政樹 田村 陽一 杉谷 政樹	（試掘） 弥生時代中期竪穴住居、方形周溝墓を検出
29	浅間山北遺跡	多気町牧	44 1,000	1,044	59.12.10 60. 1.28～60. 2.23	高見 立雄 田村 陽一 田坂 仁	（試掘） 土師器破片、天井瓦破片出土
30	浅間山南遺跡	多気町牧		470	60. 3.25～60. 3.31	河瀬 信幸 田村 陽一	遺構なし。遺物散乱（弥生前期土器）（試掘）
31	牧尻墓群　1・2・3号墓	多気町牧	960		60. 7. 1～60.10.31	田中喜久雄 河北 秀実	奈良時代の瓦溜墓
	4・5・6・8号墓	多気町牧・銀形		1,160	60.11.30～61. 3.25	田中喜久雄	1号……平墓
	7号墓	多気町銀形	200		61. 6. 9～61. 8.15	野原 宏司	2～8号…登窯
32	東禅寺（中牧）遺跡	多気町銀形	144 1,000	1,144	60.11. 1～60.11.12 60.12. 5～61. 2.28	田村 陽一 田村 陽一	（試掘） 掘立柱建物検出、中世土器出土
33	下村A遺跡	勢和村丹生	88 7,500	7,588	59.12. 6～12. 8 60. 1.28～ 3.28	増田 安生 杉谷 政樹 吉本 康夫 岡嶋 信幸 上村 安生	（試掘） 石鏃・石匙・小形剥片・尖頭器等出土
34	下村B遺跡	勢和村丹生		44	59.12. 8～12. 9	増田 安生 杉谷 政樹	遺構・遺物なし（試掘）
35	岩谷遺跡	松阪市矢津町	740 4,700	5,440	61. 2.27～ 3.25 61. 8.20～62. 3.18	田坂 仁 野原 宏司 野田 修久	（試掘） 五輪塔など出土。寺（興徳寺）勝乃伝説に高つ付。
36	鎌形（牧）中世墓群	多気町銀形		520	61. 7. 1～ 9. 6	野原 宏司	石組の中世墓13基検出
37	天神山古墳群	松阪市伊勢寺町、岩内町		1,750	61. 9.20～11. 4	新田 洋	横穴式石室墳主体の古墳群
38	増田外遺跡	松阪市矢津町		1,676	61. 9. 1～10.18	野原 宏司 野田 修久	鎌倉時代の掘立柱建物など検出
39	久保屋敷（戸木）遺跡	久居市戸木町		12,000	62. 9. 1～63. 3.31	山下 憲春 田中喜久雄	中世後半掘立柱建物、井戸、土師状遺構など検出
40	ビハノ谷遺跡	嬬野町高工寺		1,600	63. 4.11～ 5.11	小板 宜広	古墳時代竪穴住居。鎌倉時代掘立柱建物検出
41	西野遺跡 北広遺跡	織野町天花寺 織野町天花寺		2,473	63. 7.12～ 8. 3	野田 修久	古式土師器片出土（試掘） サヌカイト製尖頭器片出土（試掘）

※調査総面積は151，715㎡、ただし本調査面積に試掘面積が重複する遺跡あり。

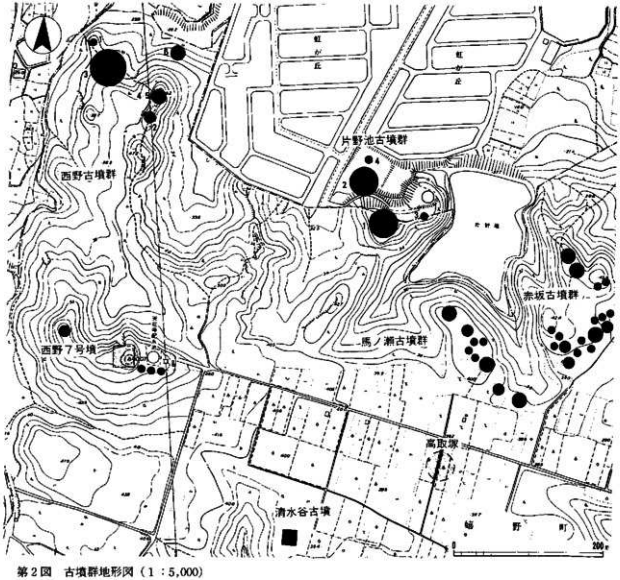
II. 一志郡嬉野町天花寺　西野（にしの）7号墳（4）

1. はじめに

西野古墳群は一志郡嬉野町天花寺字西野に所在する。近鉄中川駅の西方約3km余にある通称天花寺丘陵は、幾つもの支脈に分かれながら概ね西から東へと台地状にのびている。今回の調査で明らかになった7号墳は、その中でも最も高所にある東西にのびる尾根上に位置し、標高約57mである。

嬉野町の中央部を貫流する雲出川の一支流である中村川は、中流から下流にかけて両岸に肥沃な河岸段丘と沖積地を形成する。そして、この地域は古くは先土器・縄文時代から中・近世に至るまでの各種の遺跡が連綿と密に存在しており、まさに古墳の古代文化の凝縮された地域といえよう。

とりわけ、古墳時代を概観すると、向山古墳、筒野古墳、西山古墳、鯖山古墳といった、明確なものだけでも4基の前方後方墳の存在がまず挙げられよう。三角縁神獣鏡など豊富な鏡類や碧玉製石製品に



第2図　古墳群地形図（1：5,000）

加え、玉類の出土が伝えられる向山古墳と鈴野古墳以外は、古墳の築造時期を決定する資料に乏しいが、いずれも4世紀後半代とみて大過なく、質量的にこの地域の古墳文化の卓越性を物語るものとして、また三重県における古墳文化形成を考える上でも重要な古墳群として捉えられよう。

ちなみに、錦山古墳は昭和60年度の確認調査で、内部主体は木炭槨であることが確認された。木炭槨は東日本に集中する葬法で、伊勢では久居市木造大塚に次ぐ2例目と考えられる。成立期の古墳ともかかわるこれらの古墳は相互の前後関係も考えられ、その検討も期待されよう。

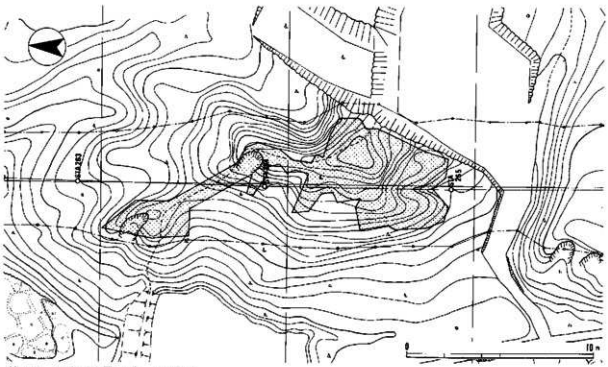
5世紀代に入ると30～40m級の大型円墳の存在が注目され、西野3号墳、片野池1・2号墳、原田山A－1・A－2号墳や郡塚古墳、高取塚古墳があげられよう。また、当地域における横穴式石室の最初の受容は、中村川中流域左岸の釜生田古墳群に求められようが、石室形態からみると、その築造は早くて5世紀末、おそらくは6世紀前葉に開始されたと考えられよう。西野5号墳からは金銅製の豪華な馬具をはじめ豊富な副葬品が出土し、西野古墳群の中でも唯一の大型横穴式石室墳であり、天花寺丘陵に展開する古墳文化の特異性を示すものと考えられるのである。

2．墳　　丘

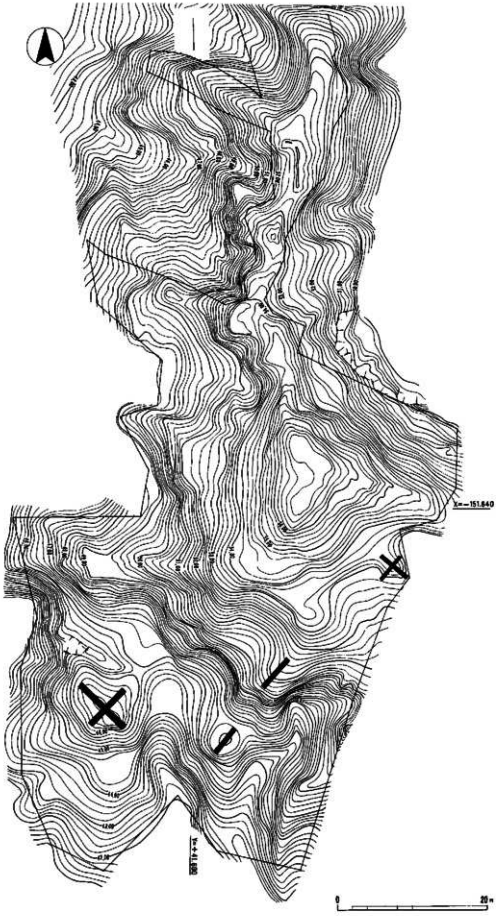
調査前の段階では、調査区内に12基の古墳が存在すると思われたが、トレンチ調査などの結果、自然地形の高まりであることが明らかとなり、最終的に7号墳1基のみが調査の対象となった。

本墳は、当初は方墳と考えられたが、不整形ながら直径15mの円墳である可能性が強い。外部施設として葺石が施され、円筒埴輪片も一点のみであるが出土している。葺石は古墳全周をめぐらず、しかもまばらである。葺石の大きさは、拳大のものから大きいものでも長径20cm程度の河原石がほとんどである。また、葺石は、その多くが墳丘にしっかりと貼りめぐらされた状況ではなく、あるいは、原位置を保っていない可能性がある。

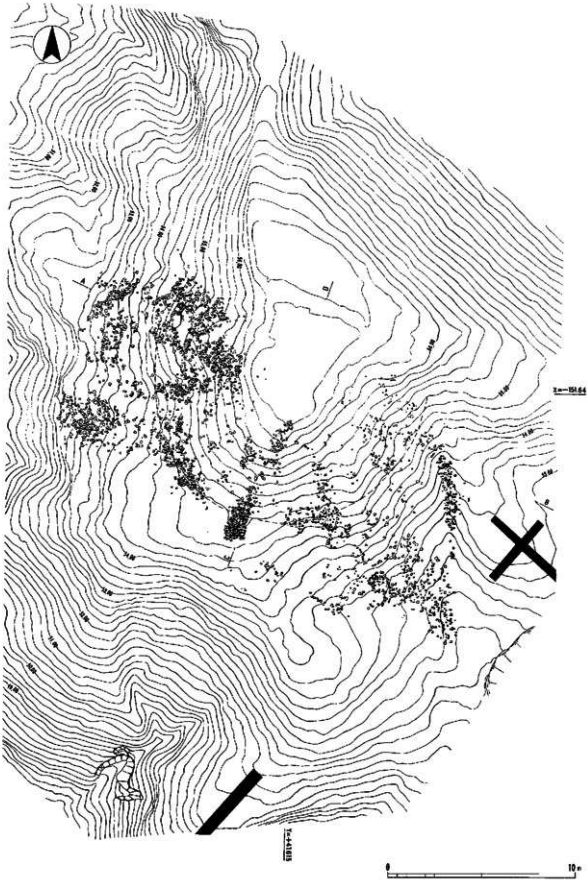
墳丘は盛土をもたず丘陵の自然地形を削り出しており、葺石が古墳全周をめぐらないという不自然なあり方からも窺える通り、古墳の全周にわたって整形したものではない。北面は全く手を加えないで、他の三面を整形する特異な形式ということができ、



第3図　調査区位置図（1：2,000）



第４図　調査前測量図（１：500）



第5図　調査区平面図（1：200）

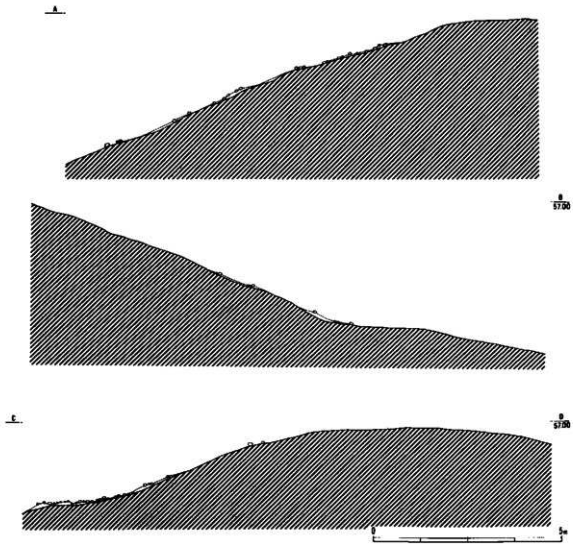
あたかも南方を意識して築造された感を抱かせる。南方には、筒野古墳をはじめ、鈴山古墳、向山古墳といった、三重県内でも屈指の古式の前方後方墳群が存在し、本墳からはよくその姿を見渡すことができる。本墳のように葺石が全周をめぐらず、特定の方向のみに施される例として県内では、亀山市所在の上野ノ木古墳[3]があげられる。

墳頂部には岩盤が露呈しており、主体部は既に流出していたようであるが、本来主体部に副葬されたと理解すべき石釧や車輪石の破片に加え、ガラス小玉、石枕片等の遺物が、墳丘斜面や裾部で分散して出土していることも主体部流出の傍証として挙げられよう。

なお、主体部付近に石材の痕跡が認められないことから、石室をもつ構造とは考えにくく、粘土槨か木棺直葬と推測される。ただ、墳丘斜面や麓からこの付近ではみられないような、石枕片と思われる板状の砂岩片が出土し、一部に朱の付着したものや、ノミの痕跡をもつものも存在するので、主体部は組合せ式石棺であった可能性も考えられる。

3．出　土　遺　物

主体部が既に流出していたため、出土遺物はほとんど細片で総数も少ない。しかしながら、石釧や車輪石のような石製品に加え、石枕片等、三重県内でも出土例の限られる貴重な資料が出土している。そ



第６図　墳丘断面図（１：100）

の他には、土師器片若干と円筒埴輪片1点、須恵器片1点、砥石1点が出土した。

（1） 土師器

壺（1） 壺の肩部で、器壁は薄く、焼成は軟弱である。胎土は粗砂を含み、色調はやや赤みをおびた褐色である。

庇部穿孔土器（2） 壺底部であり、胎土は粗砂を含み、焼成は軟弱である。1と同一個体の可能性もある。

円筒埴輪（3） 墳丘裾で出土した。器壁は薄く、胎土は粗砂を含む。焼成はやや軟弱で、色調は淡褐色で、底部と思われる。

（2） 石製品

石鋤（4） 墳丘面でそれぞれ離れて3片出土した。復元すると、径約10.0cm、孔径約 6.4cm、高さ 1.6cmで、表裏両面に放射状の刻みが施されている。外周部での刻みの間隔は約 2.5mmで、表裏とも全周を区画する匙面取がみられるが、三分割か四分割かは判断できない。また、外側面には ロクロによる匙面取が施され、内側面にはロクロ削りのあとが観察される。淡緑色を呈す凝灰岩製で、風化のため軟弱化している。

石鋤（5） 推定径約8.0cm、孔径約4.8cm、現存部分の高さ2.1cmで、（1）に比して表面の傾斜が急である。また、放射状の刻みは表面のみで細かく、その間隔は外周部で約2mmである。やはり墳丘斜面で出土した。（4）と同様の石材を使用している。

車輪石（6） 墳丘斜面で2片出土し、同一個体と思われる。石鋤と同様に、淡緑色を呈する凝灰岩製で、復元すると輪郭は卵形を呈し、内孔は直径約 5.2cmの正円形と推定される。現存部分の高さは、最高部で 1.6cmであり、表面には放射状に幅広い匙面取が施され、その峰と谷にそれぞれ放射状に一本ずつ刻みが施されている。裏面は平坦できれいに磨かれている。

ガラス小玉（7） 細長い中空のガラス棒を細かく截断したもので、技法的にも古い時代の系譜を引くものである。截断した後は、何の加工もされておらず、そのため形態は丸みをおびない。径 4.8mm、孔径 2.4mm、重さ0.08gで緑青色を呈し、墳丘の裾からさらに離れた位置で出土した。

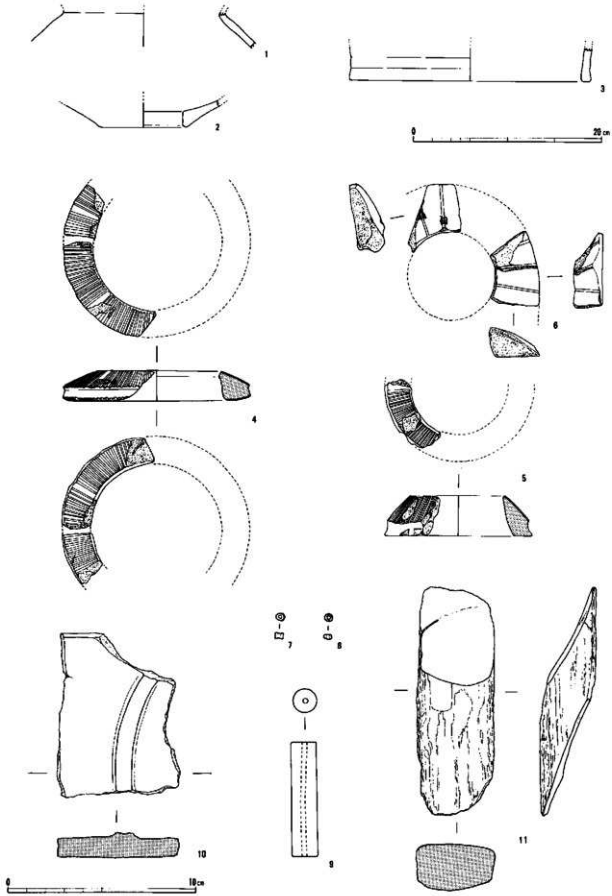
ガラス小玉（8）（7）と同様に、細長い中空のガラス棒を細かく截断したものであるが、截断面はきれいに磨かれ、丸く面取りされており（7）に比して、ていねいな作りである。径 4.4mm、孔径2mm、重さ0.06gで、色調は緑青色であるが、（7）よりも淡い。墳丘で出土した。

管玉（9） 長さ 6.1cm、太さ 1.3cmと大型のものである。淡緑色を呈し、硅質の固い凝灰岩をていねいに磨いて仕上げられている。両側から穿孔されており、穿孔径は 3.1mm、重さ20.9gである。転落したらしく、墳丘からかなり離れた位置で出土した。

石枕（10） 墳丘裾部で出土した。板状に剥離する板理をもつ砂岩片で、ていねいに磨いた表面に、幅約 0.8cmの高まりが弧を描いて削り出されている。高まりの部分は全体に欠けており、本来の高さは不明である。この破片の一辺は、ていねいに磨かれている。なお、科学的分析の結果、表面の一部に水銀朱の痕跡が確認された。[6] 現存の厚さは1cm弱であるが、裏面には板状に剥離した痕跡があり、本来はも

古　墳　名	墳　形	石　鋤	車輪石
鳴野古墳（鳴野町）	前方後方	○	
西野3号墳（鎌野町）	円	○	
西野7号墳（鎌野町）	円	○	○
高取塚（鎌野町）	円	○	
原田山古墳群（鎌野町）	円		○
向山古墳（松阪市）（鎌野町）	前方後方	○	○
茶臼山古墳（松阪市）	帆立貝？	○	
久保古墳（松阪市）	円		○
高田2号墳（松阪市）	円	○	
志氐神社古墳（四日市市）	前方後円		○
上椎ノ木1号墳（亀山市）	円	○	
石山古墳（上野市）	前方後円	○	○

第3表　石鋤・車輪石出土古墳（三重県内）⑤



第7図　出土遺物実測図（1～3は1：4，4～11は1：2）

っと肉厚であったと考えられる。

内部主体が不明であるが、仮に本墳が木棺直葬としても、千葉県石神2号墳[6]のように石棺を使用せず木棺に石枕を用いる場合もあり、石枕であると思われる。もし、そうであると県内では、井田川茶臼山古墳[7]に次いで2例目となる。

砥石 (11)　調査区内の表土下で出土した。材質は熱変成を受けた緻密な砂岩質で、磨り面は両端にあり、それぞれ対向して斜めに使用している。

その他、須恵器片が1点出土している。口縁部に波状文をもつが器種は不明である。

4．結　語

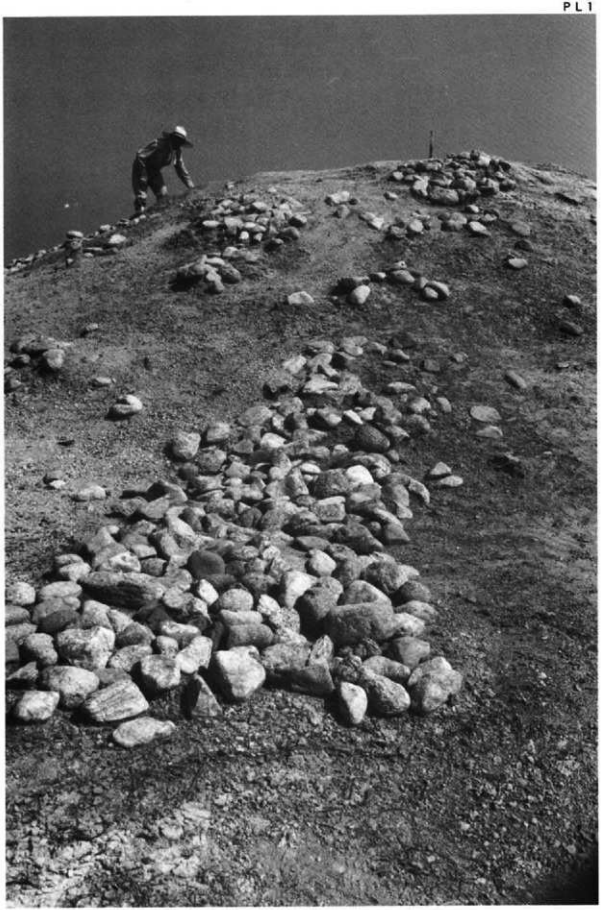
雲出川下流域に集中する筒野古墳、向山古墳、西山古墳をはじめとした前方後方墳群は、三重県における古墳文化の成立を解明するうえで、きわめて重要な意味をもつことはあらためていうまでもないであろう。これらは、詳細に調査されたものではないが、ほぼ実態のわかるものとして、筒野古墳、向山古墳、錦山古墳等があり、内部主体は粘土槨か木炭槨で、いわゆる碧玉製装飾品や、三角縁神獣鏡等の副葬品から、概ね4世紀後半代のものと考えられている。

西野古墳群は、これらにきわめて隣接する丘陵に立地し、3号墳と本墳から碧玉製装飾品が出土していることや、向山古墳で採集された底部穿孔をもつ土師器壺に、3号墳と本墳で出土したものが類似することから、ある程度の年代幅は考慮しながらも、ほぼ同時期には古墳の構築が開始されていたと考えて差し支えないと思われる。とすると、雲出川下流域に一時的ながら定着したと思われるこの時代の伝統的墓制ともいうべき「前方後方墳」を、時間的にも空間的にもきわめて近いと思われる本墳がなぜ採用しなかったかということが、雲出川下流域における古墳文化を考慮するだけでなく、松阪周辺を含めたより広範囲での古墳文化を論じるうえで重要な視点となり得よう。

特に、墳形だけでなく、あたかも南方を強く意識したと考えられる本墳のあり方は、雲出川下流域の前方後方墳群が、既に存在していたか或いはこれから開花しようとしていたかは別として、何らかの社会的背景を抜きにしては考えにくいといわねばならない。むしろ、そのような観点で考えてこそはじめて、本墳の構造における特異性が理解できるのではないであろうか。と同時に、雲出川下流域における前方後方墳群の消長に関する諸問題にもせまり得るのではないだろうか。　(山崎恒哉・稲本賢治)

〔註、参考文献〕

① 一志町教育委員会　伊勢野久好氏の御教示による。
② 註①参照。
③ 駒田利治・浅尾　悟他「上椎ノ木古墳・上椎ノ木遺跡」『一般国道1号亀山バイパス・埋蔵文化財調査概要VI』三重県埋蔵文化財センター　1990
④ 三重県農業技術センターに分析を依頼した。
⑤ 第3表の作成に当たっては、下記の文献を参照した。
・三重大学歴史研究会原始古代史部会「一志郡筒野・西口両前方後方墳について」『ふびと』20　1963
・『松阪市史　第二巻　史料編　考古』　松阪市　1978
・『三重の遺跡』　日本考古学協会秋季大会三重県実行委員会　1978
・小林行雄「三重県石山古墳調査略報」『日本考古学協会第8回総会研究発表要旨』　1951
・駒田利治・浅尾　悟他「上椎ノ木古墳・上椎ノ木遺跡」『一般国道1号亀山バイパス・埋蔵文化財調査概要VI』三重県埋蔵文化財センター　1990
・西野3号墳、草田山古墳群については、一志町教育委員会伊勢野久好氏の御教示による。
⑥ 網沢　豊・網沢克文他『東寺山石神遺跡』　千葉県文化センター　1977
⑦ 小玉道明　『井田川茶臼山古墳』　三重県教育委員会　1988



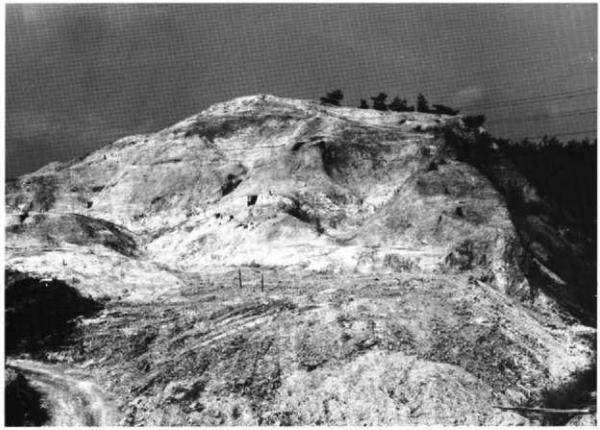
調査風景（南から）

PL2

調査前風景（北から）

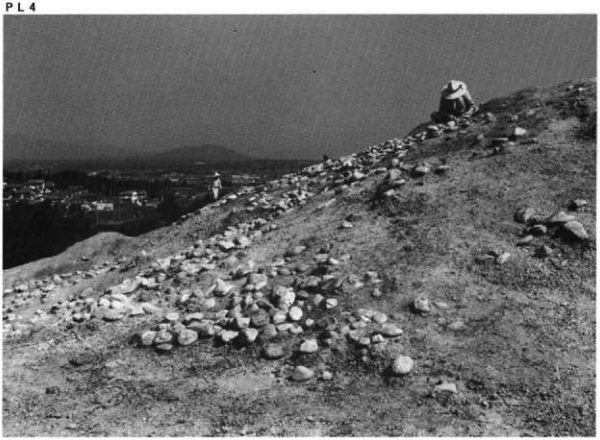
調査区全景（南から）

調査区全景（東から）

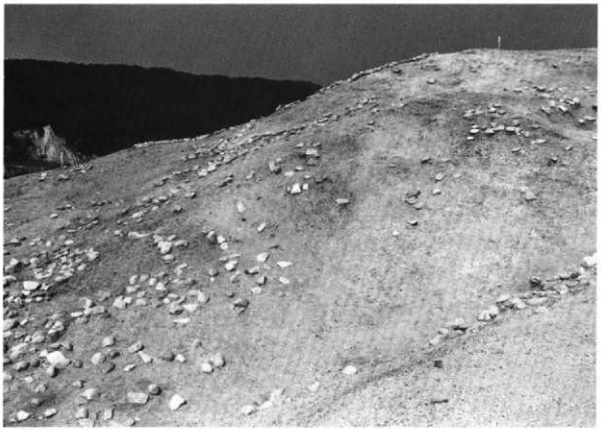


調査区全景（南から）

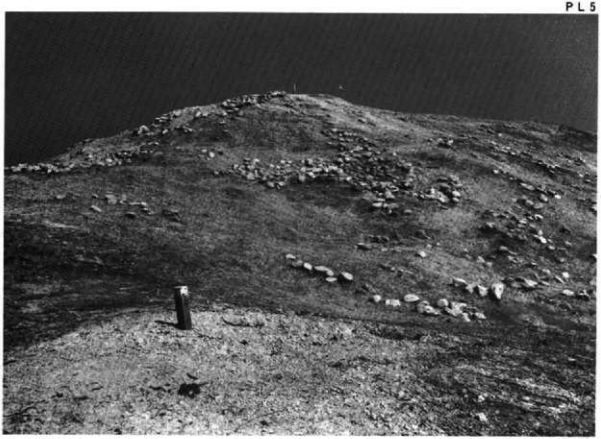
PL 4



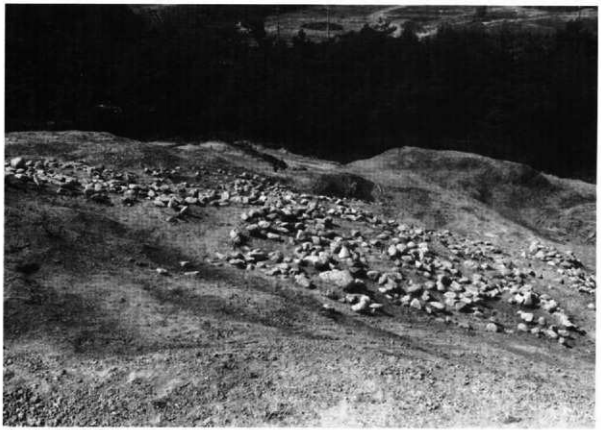
古墳近景（南から）



古墳近景（東から）



墳丘近景（南東から）



墳丘近景（南から）

PL 6

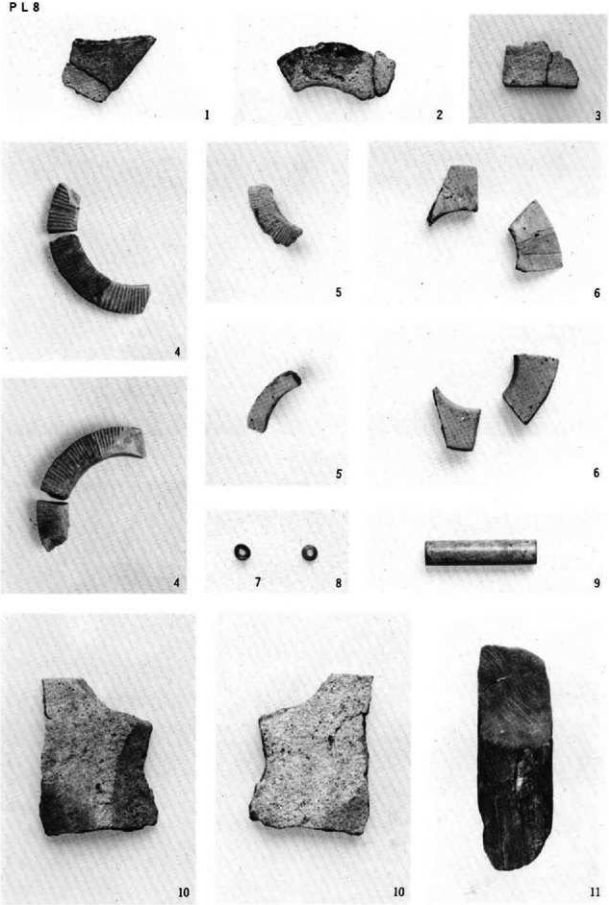
調査風景（南から）

管玉（9）出土状況（南から）

石鋸（6）出土状況（南から）

石鋸（4）出土状況（東から）

PL 8



出土遺物

Ⅲ. 一志郡嬉野町島田　焼野遺跡（6）

1. はじめに

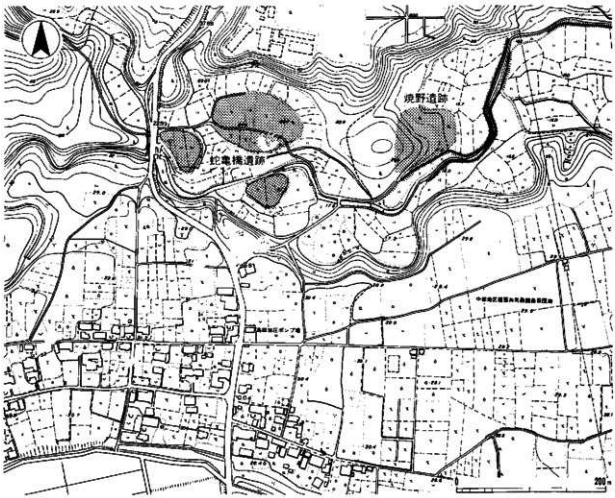
焼野遺跡は行政区画上、一志郡嬉野町島田字焼野に位置する。地形立地的には東西に延びる低丘陵の南裾にあたり、現標高は18～20mである。さて、当遺跡から町道を挟んだ南には南北に幅狭い開析谷をのぞむが、今は東（嬉野町一志の集落）に向かって広がる水田として利用されている。

そして、当遺跡は昭和56年度県営圃場整備事業に伴って調査され、縄文時代晩期の竪穴住居と合口甕棺が検出された蛇亀橋遺跡より浅い谷一つ隔てた東約80mに所在している。

調査前の地目現状は檜の植林と雑木林の縁相を呈していた。

発掘調査はまず、遺跡推定地内にトレンチによる試掘調査を第１次調査として実施し、引き続き本調査へ移行する形で行った。調査対象面積は約3,500㎡で、昭和62年５月11日から開始し、同年８月24日に終了した。

調査区における小地区割は道路センター杭を南北軸の基準とした４ｍ方眼区画とし、第９図のように東西にアルファベット、南北にアラビア数字を与え、地区の呼称は北西杭をもちいた。



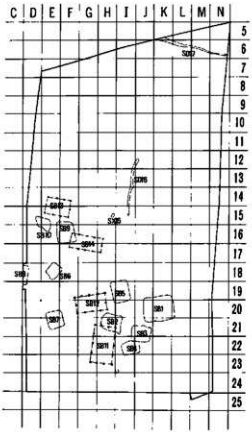
第８図　遺跡地形図（１：5,000）

2．遺　　構

当遺跡の上層の基本的層序は、第Ⅰ層　表土（腐葉土）、第Ⅱ層　茶褐色土、第Ⅲ層　黒色土（黒ボク）、第Ⅳ層　黄褐色砂礫混土（地山）である。第Ⅱ層が遺物包含層であるが、層中には縄文時代、飛鳥・奈良時代、平安・鎌倉時代の遺物が混在しており、包含層そのものを時期別に層位細分することはできなかった。

第Ⅲ層の黒ボクは、無遺物の自然堆積層で、その堆積の仕方は地形的な影響、すなわち地山の高低さにより異なり、本遺跡の場合とくに東南部では地山が高くなり、第Ⅲ層が認められないところもある。飛鳥・奈良時代以降の遺構については、第Ⅲ層上面で検出することができた。

以下、時代順・遺構種類別に個々概述してゆきたい。

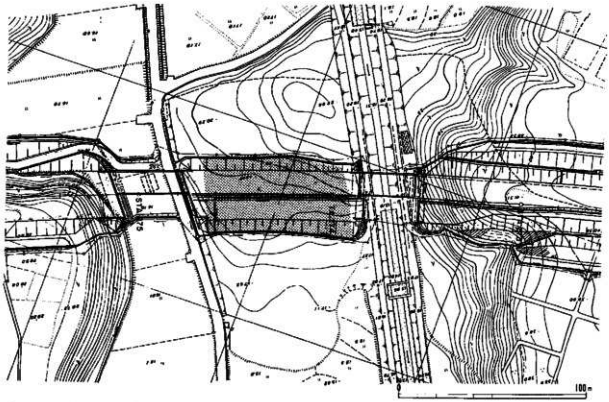


第９図　地区割図（１：800）

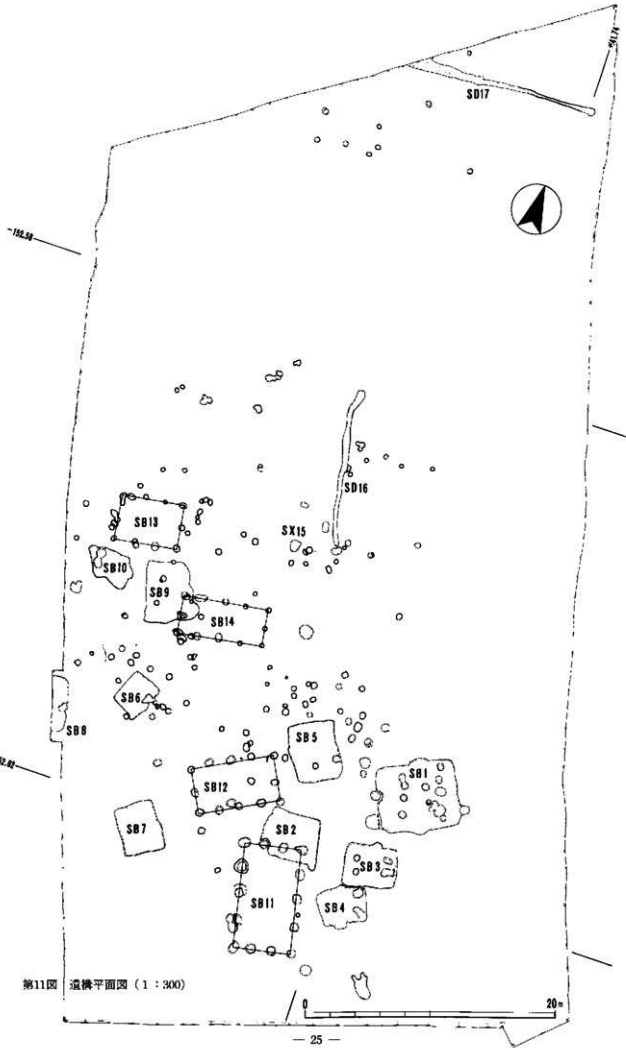
(1)　飛鳥～奈良時代の遺構

A．竪穴住居

ＳＢ１　長辺約6.5m、短辺約5.3mで南北にやや長い隅丸方形プランの竪穴住居である。床面までの



第10図　調査区位置図（１：2,000）



第11図　遺構平面図（1：300）

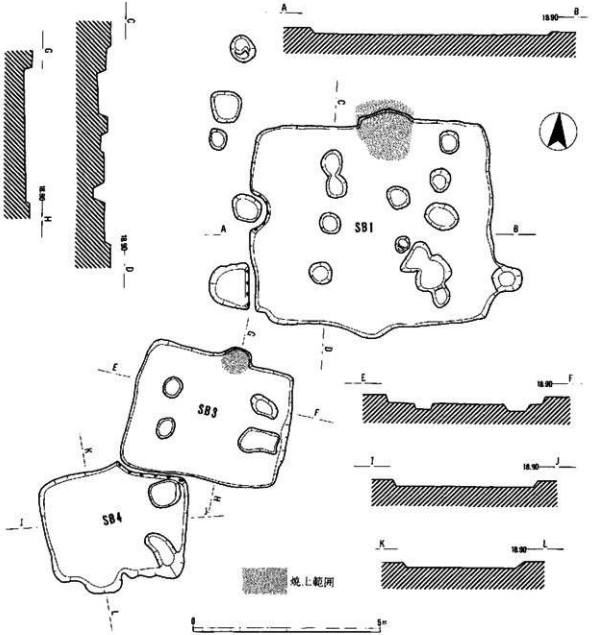
深さは約15cmで、かなり削平を受けているものと考えられる。主柱穴は４本柱と思われるが、その並びはバラツキがある。北辺のほぼ中央壁には焼土がみられ、カマド痕跡と思われる。埋土からは須恵器杯身（１）、土師器椀（２～４）・甕（５～９）・鉢（10）が出土している。

ＳＢ２　長辺約4.6m、短辺3.7mで東西に長い隅丸方形プランの竪穴住居である。床面までの深さは西側で10cm余、東側で18cm余である。主柱穴は確認できない。床面の中央やや西寄りに焼土がみられる。

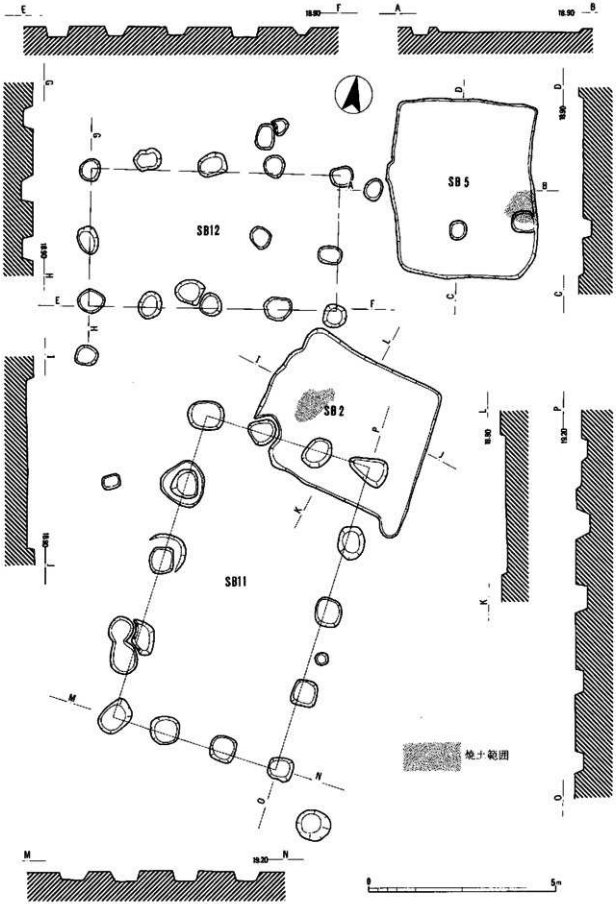
埋土は黒褐色土で、土師器甕の小片が出土している。

ＳＢ３　長辺約4.2m、短辺3.3mで東西に長い隅丸方形プランの竪穴住居である。床面までの深さは約20cm余である。主柱穴は４本柱で、その径50cm以上で、深さは15cm～20cmである。竪穴埋土は暗褐色である。北辺のほぼ中央に焼土がみられ、カマド痕跡と思われる。

このＳＢ３の埋土からは土師器杯（10）、土師器皿（11・12）が出土している。



第12図　ＳＢ１・３・４実測図（１：100）



第13図　ＳＢ２・５・11・12実測図（１：100）

ＳＢ４　長辺約3.8m、短辺2.8mで東西に長い隅丸方形プランの竪穴住居である。北東コーナーはＳＢ３に切られている。竪穴埋土はＳＢ３に比べ茶味が濃く明るい。主柱穴は見られない。また、床面あるいは壁ともに焼土認められず、カマドの有無等は不明である。

ＳＢ５　長辺約4.8m、短辺3.9mで南北に長い隅丸方形プランの竪穴住居である。竪穴埋土は暗褐色である。主柱穴はないが、東辺の中央やや南よりの壁、床面に焼土が見られ、カマド痕跡と考えられる。

埋土からは須恵器杯蓋（19）・杯身（20）が出土している。

ＳＢ６　長辺約３m、短辺2.5mで東西に長い隅丸方形プランの竪穴住居である。竪穴埋土は黄褐色砂礫混土（地山）を少量混入する暗褐色土である。

主柱穴は認められない。南辺の中央やや東寄りにピット状の出っ張りと内側に浅い穴が見られ、そこには焼土の堆積があり、カマド痕跡と考えられる。

ＳＢ７　長辺約４m、短辺3.2mで、南北に長い隅丸方形プランの竪穴住居である。竪穴埋土は黒褐色土である。主柱穴は認められない。東辺の中央寄や南寄りの壁・床面に焼土がみられ、カマド痕跡と考えられる。

ＳＢ８　調査区の西壁に一部検出された竪穴住居で、その一辺（東辺）は約4.2mである。竪穴埋土は暗褐色土である。主柱穴は見られない。東辺中央のやや南寄りには焼土が厚くみられ、カマド痕跡と考えられる。

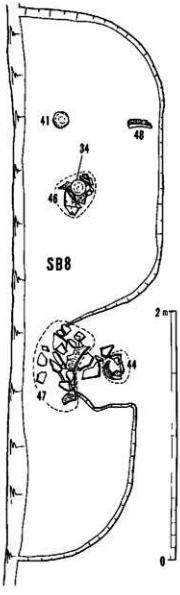
この中には、土師器甕片や須恵器甕片等がみられたが、特に土師器甕（44）は倒立した状態で検出され、また橙褐色を呈し、２次的加熱を受けており、カマド内の支柱代わりとして用いられたものかも知れない。

埋土中には、土師器椀（30～34）・杯（35・36）・皿（37～39）・甕（45・46）、及び須恵器杯（40～43）等が出土している。

また、軒平瓦片（48）、平瓦片（49）も出土している。

ＳＢ９　東辺の掘形が不定形であるが、長辺約4.8m、短辺約3.3m程に推定できる竪穴住居と見られる。

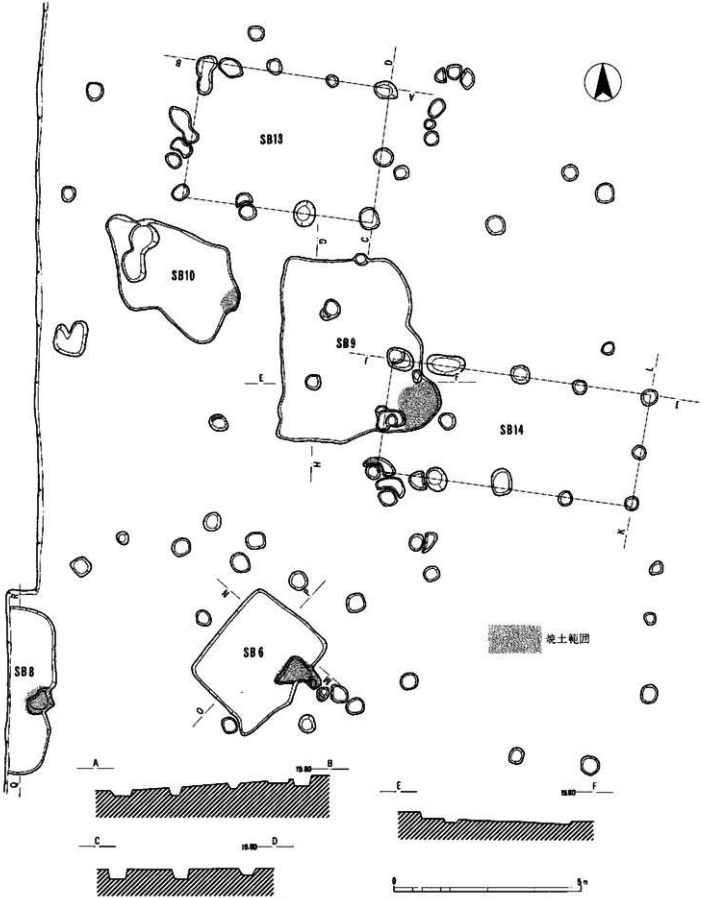
竪穴埋土は暗褐色土である。主柱穴はみられない。東南コーナーは張出し状となり、この部分に焼土がみられ、カマド痕跡と考えられる。

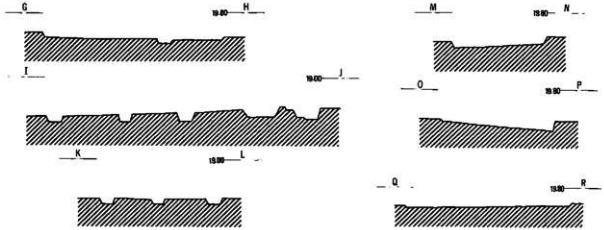


第14図　ＳＢ８遺物出土状況（１：30）

埋土からは土師器杯（13）・椀（14・15）・皿（16）と須恵器杯蓋（17）・短頸壺（18）が出土している。

ＳＢ10　形状的に竪穴住居とは言いがたいが、（竪穴状遺構とでもいうべきか）ここで説明しておく。いびつな平行四辺形を呈するもので、北辺3.3m余である。竪穴埋土は住居跡と同一で、暗褐色土である。東辺ほぼ中央が外方へ張り出しており、焼土が認められる。


SB13
SB10
SB9
SB14
SB6
SB8
焼土範囲
A
B
C
D
E
F
0
5m



第15図　ＳＢ６・８～10・13・14実測図（１：100）

埋土からは土師器椀（21）・杯（22）が出土している。

Ｂ．掘立柱建物

ＳＢ11　桁行４間（8.4m）×梁行３間（4.6m）の南北棟をもつ掘立柱建物で、棟方向はＮ８°Ｅである。柱間寸法は桁行側で約2.1m、桁行側で1.5mで、いずれも等間である。柱掘形は円形に近いものと、方形的なプランのものが混在しているが、その径、あるいは一辺は70cm～１m内外あり、大形の部類に属する。いずれも柱痕跡自体はわからなかった。柱穴は深さは一定ではなく、概ね30cm前後である。埋土は暗褐色土である。

当建物の柱穴掘形は竪穴住居ＳＢ２の埋土を切っており、この竪穴住居より新しいことがわかる。

また、当建物の東側柱の北から２番目の柱穴からは土師器杯（25）・甕（26）が、西側柱の南から２番目の柱穴からは土師器甕（27）が出土している。

ＳＢ12　桁行４間（6.5m）×梁行２間（3.6m）の東西棟をもつ掘立柱建物で、棟方向はＥ８°Ｓである。柱間寸法は桁行側で約1.6m余の等間、桁行は西側で1.8mの等間と推定されるが、東側では明らかに不等間と考えられる。北の桁と東の梁の柱の並びは不揃いである。

柱掘形は基本的に円形プランで、その径は50cm～80cm前後で、深さは20～30cm前後である。

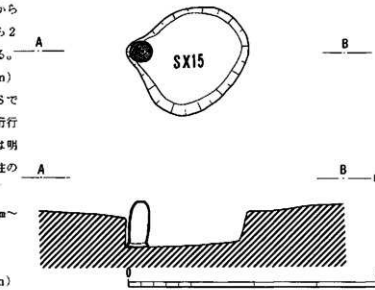
埋土からは土師器杯（23）が出土している。

ＳＢ13　桁行３間（５m）×梁行２間（3.6m）の東西棟をもつ掘立柱建物で、棟方向はＥ８°Ｎである。柱間寸法は桁行側で約1.6～1.7m、桁行側で1.8mとなり、いずれも等間と推定される。

しかし、柱掘形の大きさも柱戸通りも非常に不揃いである。柱掘形は円形プランであるが、小さいもので35cm前後、大きいものでは60cm余あり、その差異が顕著である。深さは20～30cm前後あり、これも一定していない。

ＳＢ14　桁行４間（6.9m）×梁行２間（３m）の東西棟をもつ掘立柱建物で、棟方向はＥ８°Ｎである。柱間寸法は桁行側で約1.7m余、桁行側で1.5m余で、いずれも等間と推定される。

柱掘形は基本的に円形プランと考えられるが、その大きさはかなりのバラツキがある。径35～50cmのものが多いが、長軸を含め１m近くに達するものもみられる。



第16図　ＳＸ17実測図（１：30）

C．性格不明の遺構

ＳＸ15　長軸90cm余、短軸75cm余のやや南北に長い楕円状の土坑の北東隅に土師器長胴甕（24）を倒立状態に据えられたものである。当甕の底部ほぼ中央に穿孔が施されている。

土坑は底が平坦で、深さは25cm前後である。埋土は暗褐色土である。

(2)　平安時代～鎌倉時代の遺構

A．溝

ＳＢ16　調査区の中央やや北寄りに検出された幅30～80cm余の溝で、深さは20cm前後である。埋土は地山土混じりの暗褐色土である。埋土からは土師器杯（28）が出土している。

ＳＢ17　調査区の北端で検出された溝で、ほぼ東西に走る。溝の幅は調査区北壁に接するところが広く、１m余あるが、東にむかって幅は狭くなる。底は平坦で、深さは15～20cm前後である。

なお、溝埋土からは山茶椀の口縁部片（29）が出土している。

４．遺　　物

今回の調査で出土した遺物は時代的には、大きく縄文時代、飛鳥・奈良時代、平安・鎌倉時代の３時期にわけられる。

縄文時代の遺物としては後期を中心とした縄文土器、石器があり、飛鳥・奈良時代の遺物としては土師器、須恵器と屋瓦がそのほとんどで、他に平安時代の土師器と鎌倉時代の山茶椀が若干量出土している。無論、検出遺構と同様に遺物の大部分は：飛鳥・奈良時代：に属するものである。

遺構そのものがかなり後世に削平をうけていたことも関係してか、遺構（竪穴住居等）に確実に共伴する土器の量は少ない。

以下、時代別に個々既述してゆきたい。

（１）飛鳥～奈良時代の遺物

A．ＳＢ１出土の土器（１～19）

土師器椀（１・２）　口径10～11cm内外の椀で、丸みをもつ体部から口縁部はそのまま立ち上がり端部は丸くおさまる。口縁部の内外面はヨコナデで、内面はナデ調整される。口縁部以下の底部までの外面はナデ、あるいはユビオサエがみられる。色調は黄味をおびた橙褐色を呈し、胎土は比較的精良である。

須恵器杯身（３）　口縁部の残る小片であるが、口径10cm余に復元できる。受部は短く内傾して立ち上がる。全体にロクロナデ調整されるが、底部はヘラケズリ後、未調整である。ロクロ回転順廻りである。

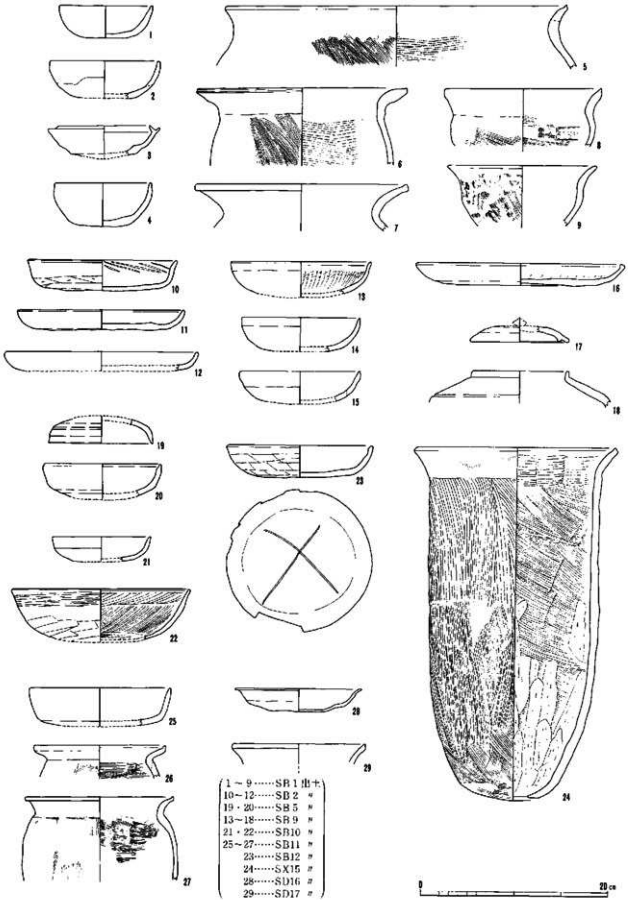
須恵器小椀（４）　口径10cm余、器高4.5cmの椀形態を量する。口縁部は直立して立ち、端部は丸くあさまる。ロクロナデ調整が全体にみられ、内底部には一方向のナデが施される。外底部はヘラ切り後、未調整である。灰白色を呈し、焼成は軟弱で有る。

土師器甕（５～８）　（８）は小形の球胴甕で、他は長胴甕形態と考えられる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整が、体部にはハケメ調整が施される。（５）は淡黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。（７）は全体に磨耗が進み、調整技法が不詳である。

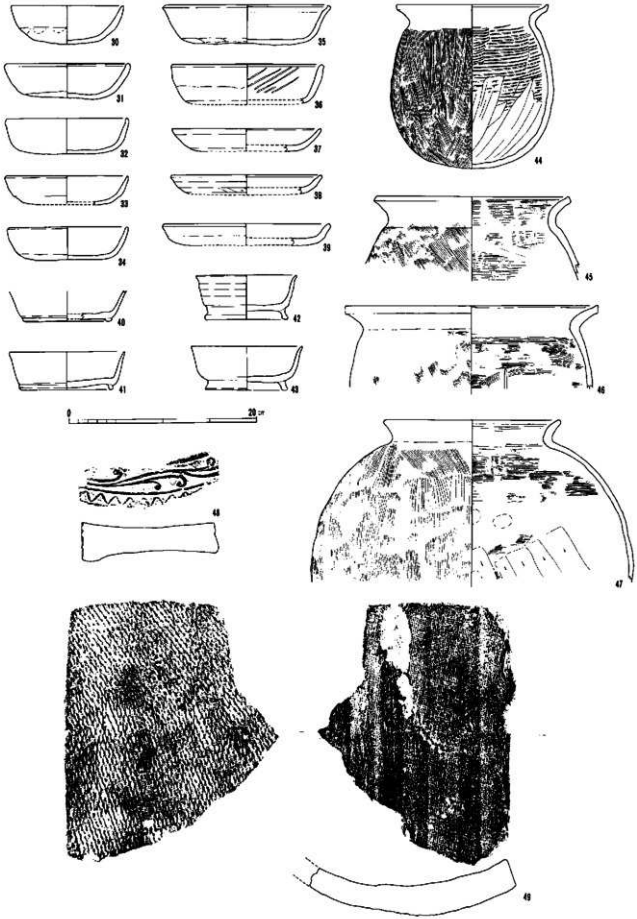
土師器鉢（９）　口径16cm余と推定される。口縁部は外反して伸び、そのまま丸くおさまる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整で、体部内面はナデ調整である。にぶい橙褐色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。

B．ＳＢ３出土の土器（10～12）

土師器杯（10）　口径16cm余、器高3.3 cm余の杯で、口縁部はわずかに外反し端部は外側に丸く肥厚する。口縁部の内外面はヨコナデ、内面はナデられる。外面の口縁以下はヘラケズリ調整される。内面には太め、稚拙な斜放射状暗文がみられる。



第17図　遺物実測図（1：4）



第18図　ＳＢ８出土遺物実測図（１：４）（49は１：３）

色調は橙褐色を呈し、胎土は精良である。

土師器皿（11・12）　口径17～20cm余の皿で、（11）の口縁端部は内側に丸く肥厚する。いずれも口縁部はヨコナデ調整、内面はナデられる。底部は両者ともにオサエによる凹凸を残す。（11）の底部内面には螺旋暗文の痕跡をのこす。色調は橙褐色を呈し、胎土は精良である。

C．SB5出土の土器

須恵器杯蓋（19）　口径11cm余で体部と口縁部との境に浅い沈線がはしる。色調は淡灰色で、胎土には砂粒を少量含む。

須恵器杯身（20）　小片であるが、口径12cm前後と推定できる。口縁端部は尖り気味となり、内側に浅い段をつくる。ロクロ回転順廻りである。色調は黄味がかった灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

D．SB8出土の遺物（30～49）

土師器椀（30・31）　口径12～13cm余の椀で、丸みをもつ体部から口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部は（30）では尖り気味に、（31）では内側にやや肥厚して丸くおさまる。いずれも粘土巻き上げの継目跡がみられる。口縁部は内外面ともにココナデ調整で、内面はナデられ、口縁部以下底部はユビオサエと若干のナデが施される。色調は黄味をおびたにぶい灰褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

土師器杯（32～36）　法量的には、口径12～13cm余のもの（32～34）と16～17cm余で深目の杯（35・36）に分けられる。前者は口縁部は内外面ともにヨコナデされ、内面はナデ調整される。外面は口縁部以下、底部は基本的に未調整であるが一部ナデとオサエが見受けられる。（35）は口縁部がやや外反し、端部は内側に丸く肥厚する。口縁部は内外面ヨコナデ、内面はナデられる。底部には丁寧なヘラケズリが施される。色調は橙褐色を呈し、胎土は精良である。（36）は直線的に立ち上がる口縁部から端部は丸くおさまる。外面は口縁部から体部にかけてヨコナデとヘラケミガキ調整がみられる。口縁部の内面はヨコナデされた後、斜放射状暗文が施されている。体部には粘土巻き上げの継目痕跡が残っている。色調は橙褐色を呈し、胎土は精良である。

土師器皿（37・38）　口径16cm余の皿で、（36）の口縁端部は内側に丸く肥厚する。口縁部はヨコナデで、内面はナデられる。底部はヘラケズリ調整が施される。色調はいずれも黄橙褐色を呈し、胎土は精良である。

土師器甕（44～47）　形態的には球胴甕（44・47）と長胴甕（45・46）に分けられる。（44）はくの字形に外反する口縁部から端部は上方につまみあげた形で、（47）の端部は丸くおさまる。口縁部は内外面ともにヨコナデされ、体部の外面は全体にハケメ調整されるが、口縁内面のハケメは残存している。また体部内面の上半は横位のハケメが、下半は底部から上に向かってヘラケズリされる。色調は茶褐色を呈し、砂粒を多く含む。

（44・45）はくの字形に外反する口縁部から端部は外方に面をつくる。

瓦（48・49）　（48）は瓦当に扁行唐草文をあしらった軒平瓦片である。凸面には縄叩き目痕がの残り、凹面はヘラケズリ調整される。色調は暗灰色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。（49）は平瓦片で、凸面には縄目痕が、凹面には布目痕が明瞭に残っている。この平瓦は桶巻きづくりによる成形である。色調は灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

E．SB9出土の土器

土師器椀（14・15）　口径12～13cm余の椀で、丸みをもつ体部から口縁部はそのまま立ち上がり、端部は尖り先となる。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整で、内面はナデ調整される。外面の口縁以下はナデ、あるいはユビオサエ調整が施される。色調はくすんだ淡褐色で、胎土には砂粒を多く含む。

土師器杯（13）　口径14.8cmの杯で、やや外反して立ち上がる口縁部から端部は内側にわずかに面をもちながら丸くおさまる。口縁部の内外面はヨコナデ調整が施され、体部外面はヘラケズリ後にヘラミガキ調整がみられる。また、内面には斜放射状暗文が2段重ねに施される。色調は赤褐色を呈し、胎土は精良である。

土師器皿（16）　口径21cm余の大振り皿で、内弯気味に立ち上がる口縁部から端部は丸く内側に肥厚する。口縁部の内外面はヨコナデ調整で、外面底部はヘラケズリされる。内面には斜放射状の暗文が施される。色調は赤褐色を呈し、胎土は精良である。

須恵器杯蓋（17）　口径10cm余のかえりをもつ蓋で、口縁端部は丸みをもっておさまる。天井部はヘラ切り後、未調整である。色調は淡黄灰色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。ロクロ回転順廻りで、内面に一方向のナデがみられる。

須恵器短頸壺（18）　短く直立する口縁をもつ壺形態と考えられる。肩と体部の境には1条の沈線が走る。色調は灰色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。

F．ＳＢ10出土の土器（21・22）

土師器杯（21・22）　口径10cm余の小ぶりの杯（21）と、口径19cm、器高6cm余の暗文入りの杯（22）の2種がある。（21）は淡褐色を呈し、直線的に立つ口縁部をもつ。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整で、内面はナデで、外面の口縁部以下はヘラケズリされる。胎土には1mm内外の砂粒を含む。（22）は丸みをもつ体部から口縁部はそのまま伸び、端部は内側に丸く肥厚する。口縁部外面はヨコナデ後にヘラミガキが施され、以下はヘラケズリされる。内面の見込み部には繊細、シャープな螺旋暗文が、その上には2段の斜放射状暗文が施されている。色調は赤褐色で、胎土は精良である。

G．ＳＢ11（柱穴）出土の土器

土師器杯（25）　底部より口縁部は直立的に立ち上がる。口径15cm内外である。口縁部は内外面ともにヨコナデされ、その外面は若干のヘラミガキがみられる。外底部はヘラケズリが施される。

色調は赤褐色で、胎土は緻密である。

土師器甕（26・27）　口径14～16cm前後の中形の球胴甕と考えられる。くの字形に外反する口縁部から端部は上方につまみあげた形の、やや受口状を呈する。口縁部は内外面ともにヨコナデで、他は全体にハケメ調整が施される。色調は両者ともに黄味をおびた淡褐色を呈し、砂粒を多く含む。

H．ＳＢ12（柱穴）出土の土器

土師器杯（23）　口径15cm余、器高3.5cm余の杯である。口縁部は内外面ともヨコナデ調整で、内面ナデ調整される。外面は口縁以下の底部までヘラケズリ調整が施されている。外底部には×印状のヘラ記号がみられる。色調は橙褐色を呈し、胎土は精良である。

I．ＳＸ15出土の土器

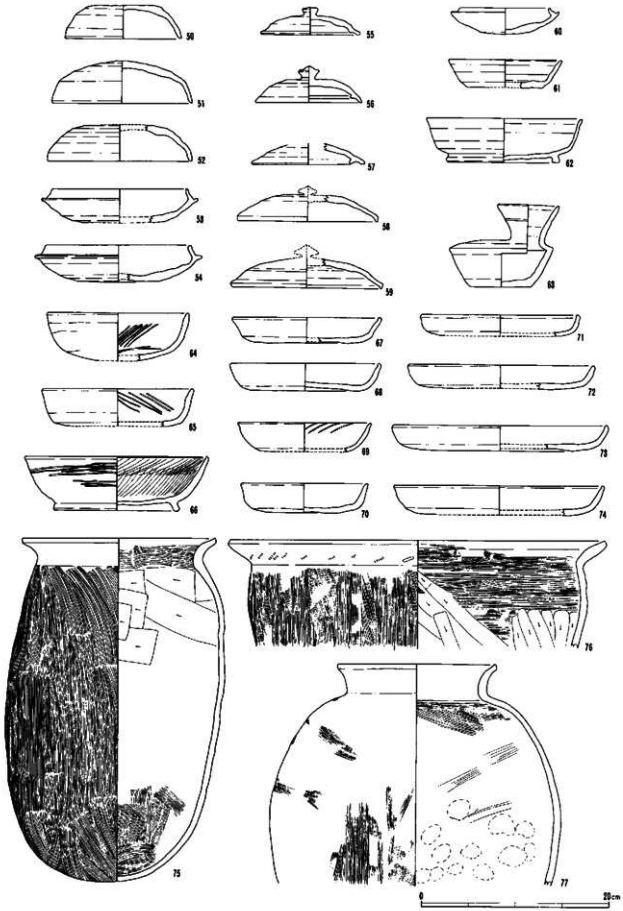
土師器甕（24）　口径20.9cm、器高37.3cmの完形の長胴甕である。胴長の体部から口縁部は外反して立ち、端部は上方に肥厚する。口縁部の外面はヨコナデ、内面は横位のハケメで以下体部は全体に斜位のハケメ調整が施される。体部の内面下半はハケメ後、ヘラケズリされる。色調は褐色を呈し、胎土は比較的緻密である。底部のほぼ中央には焼成後の穿孔がみられる。

J．包含層出土の遺物

須恵器杯蓋（50～52・55～59）　形態的にはつまみを持たないもの（50～52）と宝珠つまみを有し、口縁にかえりをもつもの（55～57）、かえりのないもの（58・59）に分けられる。（50）は口径12.5cm余の小ぶりの蓋で、天井部はヘラ切り後未調整である。（51）は中でも天井部が広範囲にロクロケズリされている。（50～52）のロクロ回転は順廻りである。かえりをもつ蓋は口径は10～12cm余におさまる。天井部はいずれもロクロケズリでロクロ回転は順廻りである。

天井部から口縁にむかって浅く陣笠状にひらく杯蓋（58・59）の口縁端部は短く垂下し、外方に面をつくる。天井部はロクロケズリ調整がなされる。いずれもつまみ部を欠損している。

時期的には（51・52）が陶邑編年[6]でいうＴＫ43型式～209型式頃（6世紀末～7世紀初頭頃）に、（50・56・57）はＴＫ217型式（7世紀中頃）、（55）はやや下がるＴＫ46型式頃、また、（58・59）は8



第19図　遺物実測図（1：4）

世紀に入る頃（奈良時代初頭頃）と考えられる。

須恵器杯身（53・54・60～62）　形態的には、口径差はあっても受部をもつ杯身タイプ（53・54・60）と蓋身の形態が逆転する時期のもの（61）、そして高台をもつ杯形態（62）に分けられる。（60）は口径9.5cm余の小ぶりの杯身で、（53・54）の底部にロクロケズリがみられるのとは対照的に底部はヘラ切り後未調整のままである。この点は（61）の底部も共通している。

（62）は低めのやや外方にハの字に踏ん張った形態の高台をもち、口縁部はわずかに外反して伸び、端部は丸くおさまる。

（53・54）は先の胸邑編年でいうＴＫ43型式頃、（60・61）はＴＫ217型式頃に、また（62）はＴＫ48型式（７世紀末）頃に比定されよう。

須恵器平瓶（63）　口径6.5cm余、器高8.8cm余の小形の平瓶である。口縁部は逆ハの字状に直線的に立ち上がり、端部に丸くおさまる。口頸部の中央に１条の沈線がはしる。全体にロクロナデ調整される。色調は暗青灰色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。奈良時代中頃（８世紀中頃）のものであろう。

土師器椀（64）　型式的には杯とすべきであるが、他との形態相異上ここでは椀として扱った。口径15cm余、器高５cm余で、口縁部は内外面ともにヨコナデ、内面はナデ調整される。体部の外面はナデとが微既なヘラミガキが施される。底部はヘラケズリである。内面にはきゃしゃな放射状暗文がみられる。また、外面には粘土紐巻き上げの継目痕が残る。橙褐色を呈し、胎土は精良である。時期的には飛鳥時代前半と考えられる。

土師器杯Ａ（65・67～70）　口径13～16cm余、器高３～４cm余の無高台の杯Ａ形態である。口縁部の形態で、端部がそのまま丸くおさまるもの（65・70）、内側に丸く肥厚するもの（67・68）、及び外方にわずかに丸く肥厚するもの（69）に分けられる。口縁部の内外面はすべてヨコナデ、内面はナデ調整される。底部の外面については、ヘラケズリされるもの（65・70）と未調整のままのもの（67～69）にわけられる。（65・69）の内面には放射状暗文がみられる。時期的には、前者の方が新しく、奈良時代中頃～後半に比定され、後者は奈良時代初頭～前半代と考えられる。

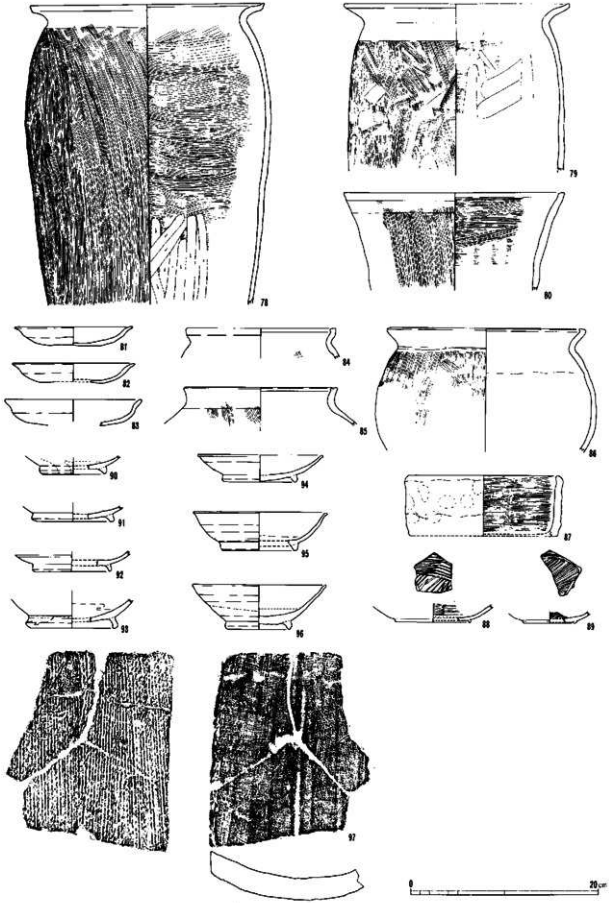
土師器杯Ｂ（66）　高台の付くものを杯Ｂとした。口径19.3cm余、器高5.7cm余で、比較的に直線状に伸びる口縁部から端部はわずかに内側にまるく肥厚し、内端部は沈線風となる。張り付け高台は高めで、ハの字状にふんばる。口縁部は内外面ヨコナデ、内面全体にナデ調整される。外面はナデ調整後、横方向にヘラミガキ調整がほどこされる。また、内面には２段の繊細な斜放射状暗文がみられる。色調は赤みがかった橙褐色を呈し、胎土は精良である。奈良時代前葉に位置づけられる。

土師器皿（71～74）　口径は16.5cm余のやや小ぶりの皿（71）と径20～23cm前後の大ぶりの皿（72～74）に分けられる。丸く内彎してのびる口縁部から端部がそのまま丸くおさまるもの（72・73）、外方へやや丸く肥厚するもの（71）と内側に肥厚し沈線を形づくるもの（74）がある。口縁部の内外面はヨコナデ、以下の内面はナデ調整される点は共通している。外底部については（71）は未調整のままで、他はすべてヘラケズリ調整が施されている。橙褐色を基調とし、胎土は精良といえる。

時期的には奈良時代の前半代におさまるものである。

土師器甕（75～79）　形態的には長胴甕（75・78・79）、球胴甕（77）、いわゆる把手付鍋（76）に３分類されよう。長胴甕はくの字形に外反する口縁部から端部は上方につまみあげた形となり、外端部に面をつくるが、口縁部の断面形や体部の最大径の位置が異なる点（体部形態）からは２種、あるいは３種に分けられる。口縁部は内外面ともにヨコナデされる（78・79）と内面は横位の粗いハケメ調整がなされる（75）がある。

体部の外面は全体に限なくハケメ調整がみられるが、内面については全体をハケメした後下、半をヘラケズリするもの（78）と上半を中心にヘラケズリするもの（75・79）がある。（79）の外面にはハケメ後に、所々ヘラケズリされている。同じ長胴甕であっても、形態と製作技法（ハケメ原体等も異なる）を異にしている。胎土には砂粒を多く含んでいる。



第20図　遺物実測図（1：4）（97）は1：3

(76) は鉢形をした体部に把手を有する鍋形態と考えられ、くの字形に外反するロ縁部は肥厚してのび、端部は面をつくる。体部の外面は全体に縦位のハケメ調整で、内面は上半に横位のハケメが、下半以下はヘラケズリが施される。

(77) は球状の体部から口縁部は短く、くの字形に外反して立ち、端部は丸くおさまる。体部の外面は全体にハケメ調整した後、ナデられ、内面は肩部はハケメのみであるが、以下はハケメ後、ユビオサエとナデツケの跡がよくのこっている。口縁部は内外面ともヨコナデ調整される。

土師器甕 (80)　推定口径23cm以上の甑上半部分である。外反気味に立ち上がるロ縁部から端部は上方に面をつくる。口縁端部付近は内外面ともにヨコナデされる。以下は外面に縦位の、内面には横位のハケメ調整が施される。

屋瓦 (97)　桶巻きづくりの平瓦片である。凹面に布目痕、凸面に縄目叩き痕がのこる。

(2) 平安～鎌倉時代の土器

A. SD16出土の土器

土師器杯 (28)　口径13.5cm余、器高2.5cm余の杯で器壁は薄い。口縁部は内外面ともにヨコナデで、内面はナデ調整される。口縁部以下底部にはユビオサエによる凹凸がそのまま残る。色調は白っぽい褐色を呈し、胎土には砂粒を少量含む。斎宮土師器編年でいう平安時代後Ⅰ期に属するものである。

B・SD17出土の土器

山茶椀 (29)　口縁部片で外反するロ縁部から端部は面をつくる。白灰色を呈し、胎土には砂粒が多い。山茶椀の藤澤編年にみるⅢ段階7型式頃（13世紀中頃）に相当しよう。

C. 包含層出土の遺物

土師器杯 (81～83)　口径12～16cm内外、器高2.5cm内外で器壁の薄い皿化した杯である。口縁部は内外面ともにヨコナデされ、内面はナデ調整である。口縁以下の底部は未調整で凹凸が残る。色調は白っぽい褐色を呈するが、胎土は比較的緻密である。このタイプの杯は斎宮土師器編年でいう平安時代中期（10世紀前半～中頃）に比定できる。

土師器甕 (84～86)　球状の体部をもつ甕形態で、口縁部は短く外反して立ち、端部は内側につまみ肥厚させる。口縁部は内外面ともにヨコナデされる。体部の外面はハケメ調整がみられるが、不徹底なナデあるいはオサエによる2次調整がみられる。(86) の体部中～下半はヘラケズリされている。内面はいずれもヘラケズリ調整により器壁を薄化しようとした跡が見受けられる。これも前述の杯と同じ斎宮土師器編年でいう平安時代中期に属するものと考えられる。

製塩土器 (87)　口径16cm余、器高6.5cm余に復元できるいわゆる志摩式製塩土器である。外面はユビオサエによる成形痕と凹凸が良く残る。内面は粗いハケメ調整である。2次的火熱を受けたと思われ、色調は赤桃味をおびた褐色を呈する。

黒色土器 (88・89)　いずれも小片で申し訳程度の低い高台がつく。内側だけを黒色にいぶしたいわゆる黒色土器Aである。体部の外面はヘラケズリされている。内面にはヘラミガキ調整が施されている。

灰釉陶器 (90～96)　破片が多いが、(94～96) はほぼ全体が窺える。すべて椀形態と思われるが、浅椀形態 (94) もある。(94・95) の口縁端部はやや肥厚してのび、丸みをもって終わる。釉は内外面ともにみられ、漬け掛け手法による。(96) の口縁端部はそのまま伸びて丸くおさまる。釉掛けは漬け掛けによる。高台の形態は (93) の細長く内側下端が内彎する二日月高台の他は、やや幅広くて低く内側下端の内彎の認められない三日月高台である。(94・95) の外底部はロクロケズリ痕が残るが、(91) ではそれをナデ消している。

時期的には猿投窯編年でいう折戸53号窯様式の古段階（10世紀後半頃）に比定されようが、中でも (93) はそれよりも古出し、(91) は時期が下るものと考えられる。

4．結　　語

1．遺構について

今回の調査で検出された主な遺構としては竪穴住居10軒と掘立柱建物4棟がある。その時期であるが、竪穴住居は中でも少々まとまった遺物が出土しているＳＢ１とＳＢ８を除くと、非常に遺物量が少なく、また土器小片で時期決定の難しいものが存在しているが、ここでは一応の見解を述べておく。

ＳＢ１は今回検出された竪穴住居の中では一番規模が大きいが、小ぶりで底部ヘラ切り未調整の須恵器杯身（１）はその形態・技法上より陶邑編年でいうＴＫ217 型式に比定でき、飛鳥時代中頃（７世紀中頃）と考えられる。同伴出する上師器椀（２～４）も形態的に当時期に矛盾しないであろう。

ＳＢ３は土師器杯・皿が出土しているが、底部の調整にヘラケズリがみられ、奈良時代後半の時期と考えられる。ＳＢ４は土器細片しかなく、時期不詳であるが、ＳＢ３に切られており、ＳＢ４より古いことはわかる。ＳＢ５からは須恵器杯・蓋が出土しているが、その時期はＳＢ１と大差はみられない。

ＳＢ８については屋瓦も混じって比較的まとまった土器が出土している。須恵器杯は高台をもつものばかりであるが、低い高台、あるいはハの字状に外方にふんばる形態の杯（40～43）であり、古くてＴＫ217型式ないしはそれ以降と考えられ、時期的には飛鳥時代中頃から奈良時代初頭（７世紀中頃～８世紀初頭頃）の時期幅が考えられる。一方の土師器も杯（35）等にその時期的特徴を読みとることができる。飛鳥時代前半の杯に比べ器壁も薄くなり、器高も低くなる傾向がみられ、また、やや外反気味に立ち上がる口縁部から端部が内側に丸く肥厚する形態より、この杯は飛鳥時代末から奈良時代初頭頃に比定され、先の須恵器年代と齟齬をきたさない。

次にＳＢ９・10であるが、宝珠つまみ（乳頭状つまみ？）をもち、口縁部にかえりを有する須恵器杯蓋（17）や内面に正放射状暗文のみられる土師器杯（13）の形態・技法上からＳＢ９は飛鳥時代中頃～後半の時期に比定され、ＳＢ10についても図示しえた２点の土器（21・22）から推定すれば、ほぼ同時期ないしはやや遡る時期のものと考えられる。なお、ＳＢ２・４・６・７の竪穴埋土からは土器細片しか出土しておらず、遺物の上からの時期決定はできない。

さて、掘立柱建物については４棟（ＳＢ11～14）検出されているが、柱穴埋土の出土土器から時期を推定できる建物はＳＢ11・12の２棟のみである。口縁部が直線的となり、底部ヘラケズリ技法の土師器杯（25）や底部から口縁部近くまで外面をヘラケズリする同杯（23）からみて当建物の時期を奈良時代中葉以降、後半期としておきたい。１点の杯だけを捉えれば、ＳＢ12の方が11より新しいと考えられる。ＳＢ13・14については遺物論的に時期決定はできないが、両者の建物の棟方向をほぼ同一にし、また南北棟をもつＳＢ11の棟方向とほぼ直交している点（配置論）からみれば、ＳＢ11と同時期の所産とも推定できるのである。

以上、今回検出された竪穴住居、掘立柱建物の時期についてのべたが、要約すると竪穴住居はＳＢ３（奈良時代中頃）をのぞき、また竪穴と掘立との切り合い関係等も考慮にいれれば、およそ竪穴住居は飛鳥時代中頃～奈良時代初頭頃に、掘立柱建物は奈良時代中葉～後半頃につくられたものと判断できる。

したがって焼野遺跡の当調査区を見るかぎり、竪穴住居の集落から時間的には程なく掘立柱建物集落へと移行した姿の一部が理解できるのである。しかし、竪穴ＳＢ３などは本来の居住的空間としての竪穴ではなく掘立（ＳＢ11等）の付属的施設（厨房等）として存続した竪穴タイプとして位置づけられるものとも考えられる。

また、竪穴住居細部については、ＳＢ１を除きその規模は一辺３～４ｍ前後と小さく、基本的に周溝、主柱穴、貯蔵穴はもたないタイプであったと考えられる。カマドについてはその痕跡としての焼土堆積等が全くみられないもの（ＳＢ4）もあったが、その焼土範囲と位置からみて北ないし東カマドが多い。

最後に集落の広がりであるが、調査区西壁にかかって検出されたＳＢ８や西方向に包含層が厚くなる状況から、当然のことながら西あるいは西南方向への集落の広がりが予想されるところである。

２．遺物について

焼野遺跡での出土遺物は時代的に最も古くは縄文時代に遡る。遺構としては今回の調査範囲の中では見つかっておらず、縄文時代の遺物は全て包含層出土である。縄文時代後期を中心とした土器で、他に定角式の摩製石斧、石鏃、剝片等の石器も出土している。縄文時代の遺物については今回の報告からは除外してあるが、近い将来に別稿公表を期している。

検出遺構のその殆どは、飛鳥・奈良時代であり、当然のことながらこの時代（時期）に属する遺物が量的にも多くを占める。種類としては土器がほとんどであるが、当遺跡が寺院跡ではなく集落跡としては屋瓦の出土がやや目立った。飛鳥・奈良時代の土器は須恵器、土師器であるが、須恵器には飛鳥というより明らかに古墳時代後期（６世紀代）に入るものも少量みられ、今回の調査では当時期の竪穴住居等は検出できなかったが、周辺部に存在した可能性は否定できまい。遺構に伴出する土器は少なく、多少なりともＳＢ１やＳＢ８でまとまって出土している。前者は飛鳥時代中頃（７世紀中頃）、後者はややドって飛鳥時代末～奈良時代初頭（７世紀末～８世紀初頭）の当地域での土器様相の一端が窺えるのである。

遺物に見るかぎり、奈良時代末から平安時代前半にはいる遺物はみられない。検出遺構としては溝ＳＤ18のみであるが、次に焼野遺跡が生活の舞台となるのは平安時代中期である。器種としても、供膳具としての土師器杯、黒色土器椀、灰釉陶器椀と煮沸具としての土師器甕等、いちおう当時期の代表遺物が少量ながら揃っている。

中世（鎌倉時代以降）の遺物については若干量の山茶碗片があるのみで、当遺跡がこの時代以降には継続しないことがわかる。

以上のように、今回の調査範囲では焼野遺跡は飛鳥・奈良時代を中心とした集落遺跡であり、その遺構（生活・建物）としては竪穴住居と掘立柱建物を主体としたものであったことが判明した。特に包含層遺物については時期別に主なものを抽出したにとどまり、屋瓦の出土問題をも含め、当遺跡の本来的性格の究明については今後の更なる課題と致したい。

（新田　洋）

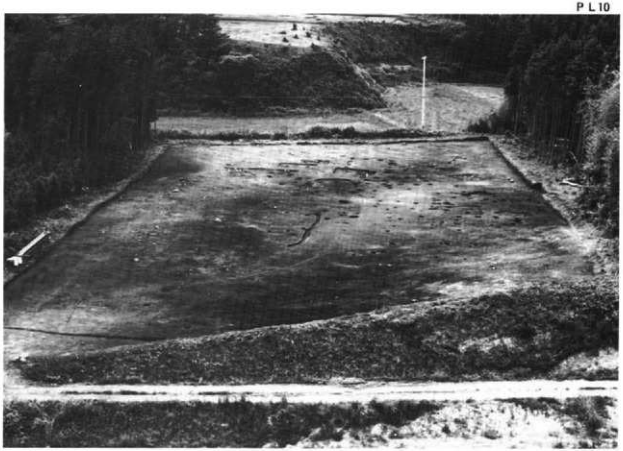
〔註〕

① 三重県教育委員会『昭和56年度県営圃場整備地域埋蔵文化財発掘調査報告』（1982）
② 平安学園考古学クラブ『陶邑古窯址Ⅰ』（1966）
③ 『宮宮跡の土師器」『史跡宮宮跡発掘調査概報』（三重県教育委員会・三重県宮宮跡調査事務所・1984）
④ 愛戸市歴史民俗資料館『研究紀要Ⅰ』（1982）
〃　『研究紀要Ⅱ』（1983）
⑤ 愛知県教育委員会『愛知県古窯址群分布調査報告（Ⅳ）付・猿投窯の編年について』（1983・3）

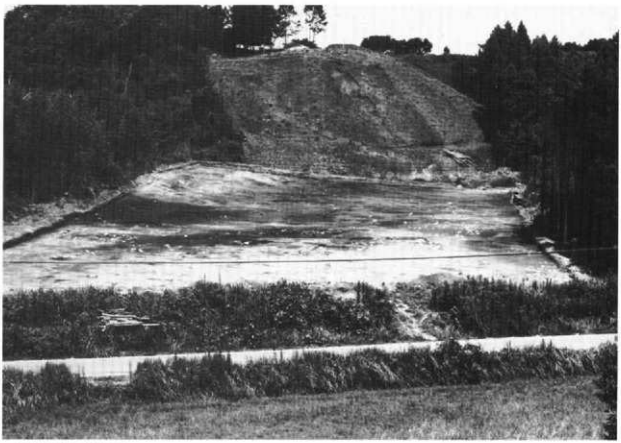
PL9

調査前近景（南から）

調査風景



調査区全景（北から）

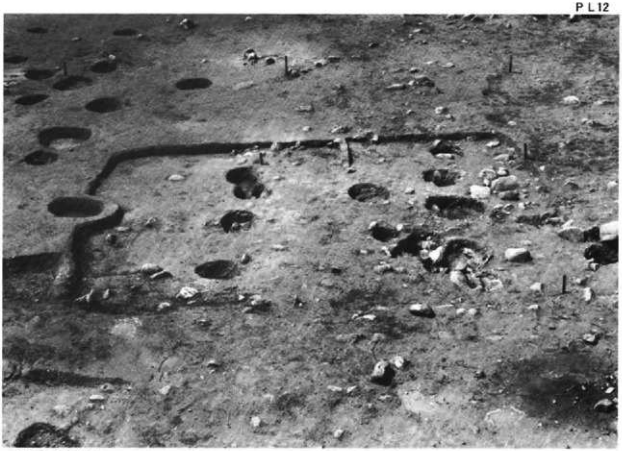


調査区全景（南から）

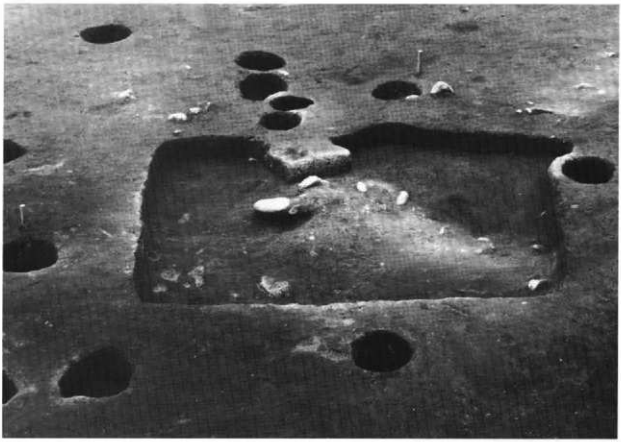
PL11

SB1・SB3・SB4（南から）

SB2（西から）

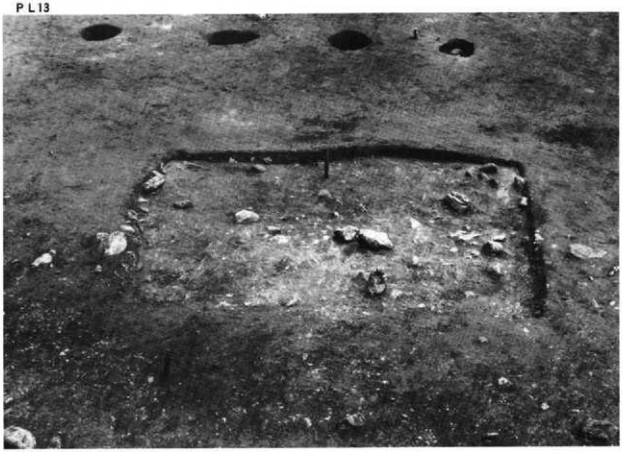


SB1（南から）



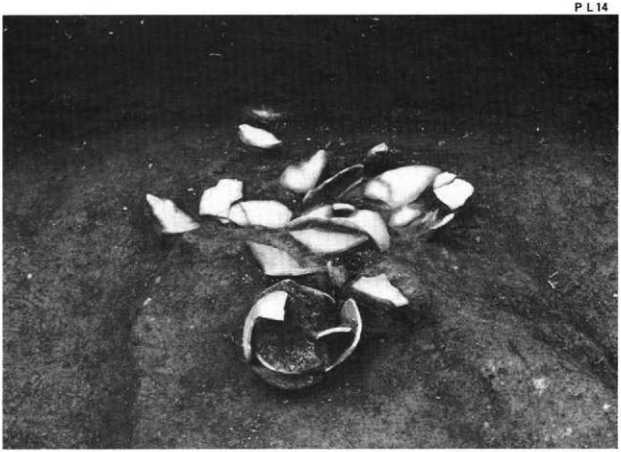
SB6（南から）

PL13

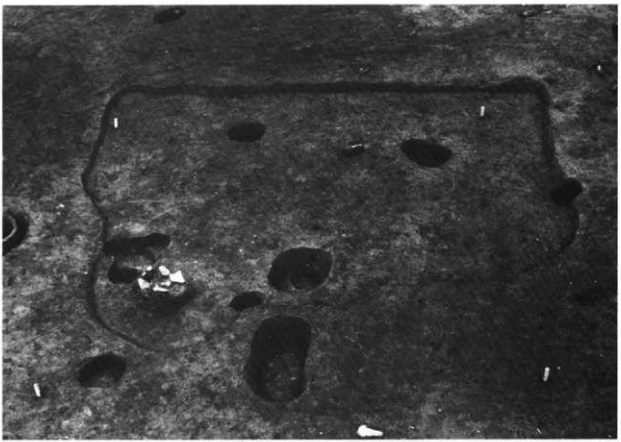


SB7（西から）

SB8（東から）

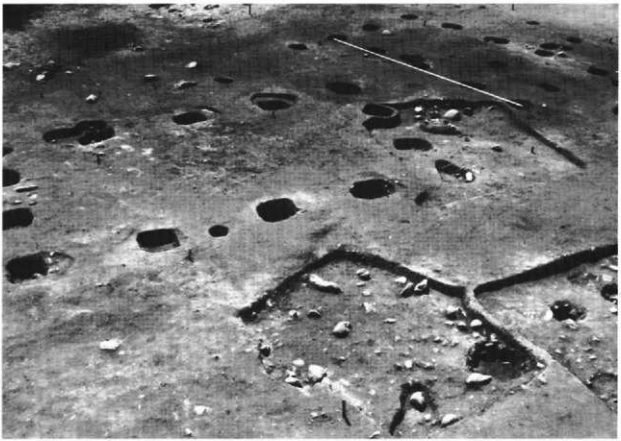


SB8カマド周辺遺物出土状況

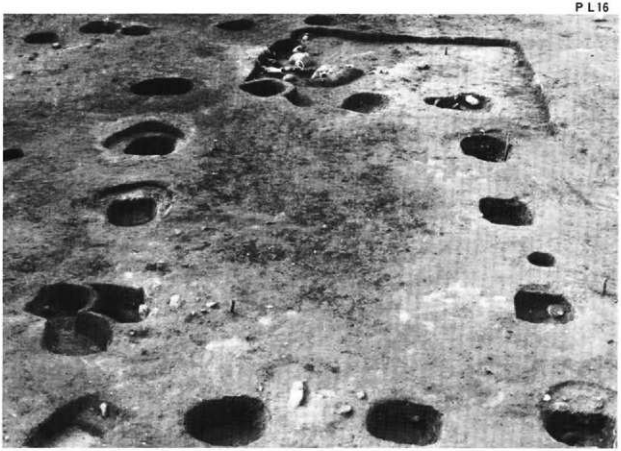


SB9（西から）

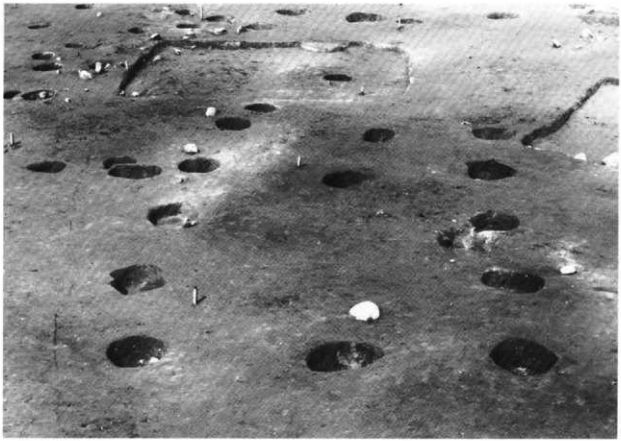
SB13（東から）



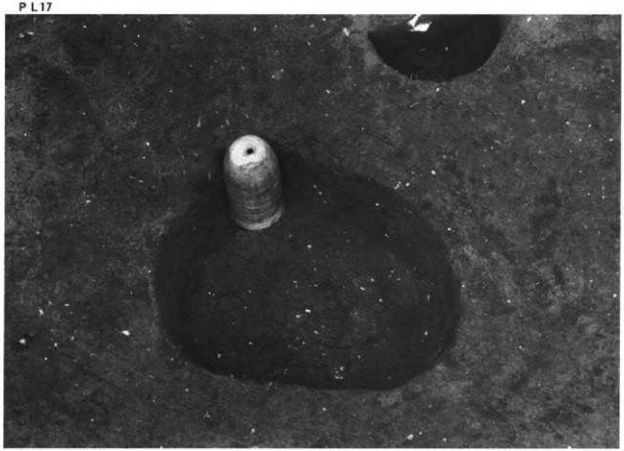
SB11・SB12（東から）



SB11（南から）

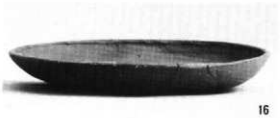


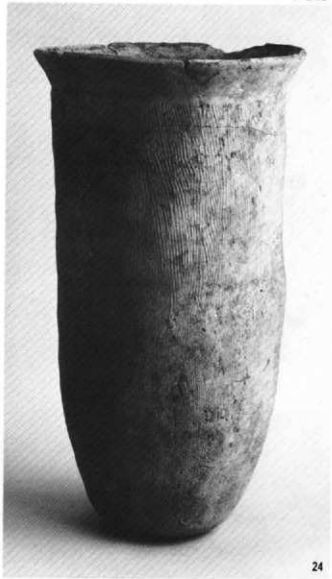
SB12（西から）

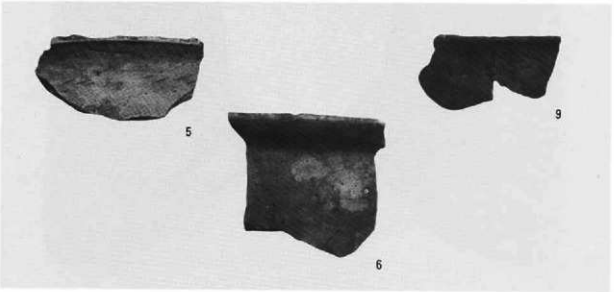


SX15（西から）

SX15・土師器甕出土状況（西から）







出土遺物（1：3）

PL19

30

42

43

31

PL

34

44

35

48

49

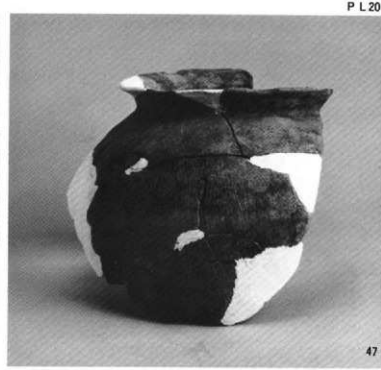
49

出土遺物（1：3）

51

56

60


47

62

63

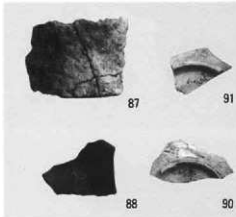
64

65

75

出土遺物（1：3）

PL21



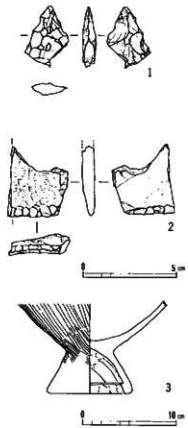
出土遺物（1：3）

Ⅳ．一志郡嬉野町大花寺　西野遺跡・北広遺跡　(41)

当遺跡は、西野７号墳の南に広がる緩やかな台地に位置する。現況は山林である。遺跡名は発掘地点の小字名から北部を「西野遺跡」、南部を「北広遺跡」とした。

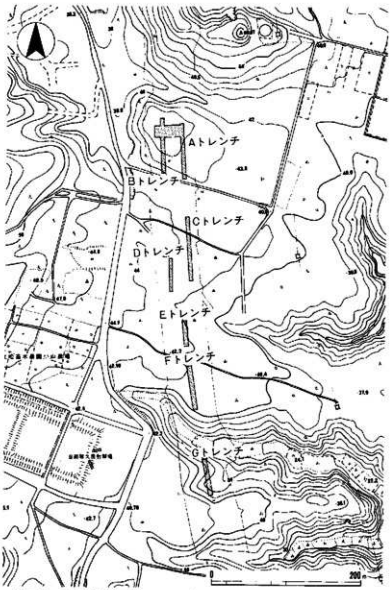
第１次調査は昭和63年７月12日～同年８月３日にかけて行った。Ａ～Ｇの７本のトレンチを試みた結果、遺構は全てのトレンチで検出されず、遺物がＢトレンチで若干出土するにとどまった。Ｂトレンチの遺物は古式土師器片（３）とサヌカイト製剥器片（２）で、トレンチの北（丘陵の頂部）で出土した。その出土面は表土から約20cm下の黄褐色土の上面であった。黄褐色土の下は礫混じりの地山である。確認のため、トレンチＡ・Ｂに直交するかたちで発掘区を拡張したが、遺構、遺物は見られなかった。そのほか、表土除去の際、Ｅトレンチで、表面風化の進んだサヌカイト製の尖頭器片（１）が出土した。また、Ａ・Ｂトレンチ北方で梵字を４面に刻んだ一石の五輪塔（４）が表採された。

以上の結果により、当遺跡の本調査は実施に至らなかった。



第22図　遺物実測図（1・2…1：2，3…1：4）

遺物写真（1：2）



第21図　調査区位置図（1：5,000）

第23図　五輪塔実測図（1：4）

五輪塔（1：4）

Aトレンチ（南から）

V. 一志郡嬉野町島田　焼野古墳（5）

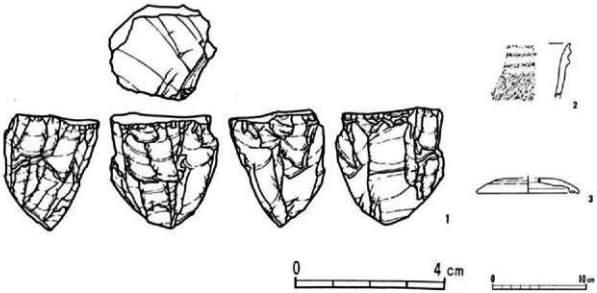
調査区は、行政的には一志郡嬉野町島田字焼野に属し、島田の集落の北東約300mの標高40m程の丘陵台地上にある。大部分が茶畑として利用され、チャート製あるいはサヌカイト製の石器片が散布していた。さらに、南端に古墳状の高まりが2m余り見られ、立地的にみて、古墳の他に旧石器時代か縄文時代の遺構が検出されるものと思われた。

1987年7月11日から9月30日まで、第一次調査を行った。まず、北側の平坦部分に幅2m、全長68～95cmのトレンチを5本設定し調査した結果、チャート製細石核（1）・フレイク、縄文土器片（2）、須恵器坏蓋（3）等が少量出土した。しかし、遺物包含層や遺構は検出できなかった。さらに、古墳状の高まりがみられる南端部に幅40cmのトレンチを十文字に設定し、盛土状況を層位的に確認した。また南斜面にも幅2mのトレンチを設定し調査した結果近代以降の人工的な盛土であり、古墳でないことが判明した。

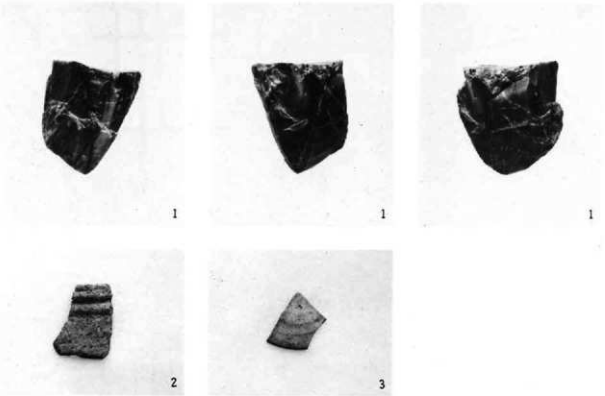
第24図　遺跡地形図（1：5000）

第25図　調査区位置図（1：2000）

結局、開墾等により遺構面はすでに削平されており、遺構は全く検出されず、遺物包含層も認められなかった。事業予定地内に限れば遺跡は完全に破壊されたものと考えられ、本調査には至らなかった。



第26図　出土遺物実測図（1は1：1，2・3は1：4）



出土遺物（1は1：1，2・3は1：3）

調査区遠景（北から）

調査区近景（北から）

平成3(1991)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告87-10

近畿自動車道（久居～勢和）

埋蔵文化財発掘調査報告

―― 第3分冊 4 ――

1991(平成3)年3月31日

編集　三重県教育委員会
発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷　オリエンタル印刷株式会社